
本からみつける恋の文字

伊達倭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本からみつける恋の文字

【ZPDF】

Z6290D

【作者名】

伊達倭

【あらすじ】

恋に興味のない一人が、付き合うことになってしまった。彼らは恋を知ることができるのである。そして、その恋は実るのである。穏やかな春の日差しの中、ゆっくりと物語は動き出す。

第一話 恋人になろう（前書き）

「はじめての×××。」企画に参加申請した作品です。

第一話 恋人になろう

「それじゃあ、付き合つてみようか」

彼女の口からそんな言葉が飛び出したのは、よく晴れた春の日のことだった。

放課後は文芸部の部室に顔を出すのが習慣になつていて。

名田上は文芸部員で、あまつさえ部長といつ肩書きまで持つていて、当然と言へば当然のことなのだが、僕は小説を書いたことはない。それどころか、作文すら得意ではない。専ら読むだけである。

去年の今頃、ちょうど入学してすぐに所属部員がゼロの文芸部に入部したのは、一念発起して作家を目指そうと思つたわけでもなく、創作意欲に掻き立てられたからでもない。放課後にのんびりと読書を楽しむ時間と場所が欲しかつただけである。

五人兄弟の三番目に生まれた僕は、家の中に一人で落ち着くことのできる場所がない。二つ年上の姉は受験に向けてピリピリしており、弟達はそれを気にすることもなく元気に騒ぐ。姉の怒号と弟達の嬌声に、唯一の趣味である読書を阻害されていた僕は、最初は図書室を根城にしていたのだが、そこは受験生のための勉強の場で、落ち着いて読書をするところではなかつた。

市立の図書館は高校から離れており、毎日喫茶店に通うほどの小遣いもなかつた。どうしようかと困っていた折に、廃部がほとんど決定した文芸部の噂を耳にしたのだ。

「文芸部が潰れたら、他に部費が回るし、部室も空くらじいのよ。先輩達が喜んでた」

「ウチの部にも部費、回つてこないかなあ」

増えた部費で何を買うかと相談しているクラスメイトには申し訳なかつたが、僕はそれを聞いたその足で、文芸部の顧問を訪ねた。

聞けば、今週中に入部希望者がいなければ廃部するはずだったそうだ。

「活字離れってよく聞くけど、君みたいな子がいて嬉しいわ」

顧問の若い国語教師は笑顔で入部届を書かせて、そのまま僕を部長に任命した。他に部員がないのだから仕方がない。部長会議など、色々と面倒な仕事もあるらしかったが、顧問の次の言葉で気にならなくなつた。

「少ないけど部費も出るから、参考資料に小説を購入してもいいのよ」

五人兄弟の宿命なのだろうか。小遣いも本の置き場も心許なかつた僕にとって、これほどありがたい話はなかつた。

こうして、僕は落ち着いて読書をする時間と環境。ついでに資金まで手に入れた。

まず、埃っぽい部屋を丁寧に雑巾がけして、本棚を整理した。先代が何年前に卒業したのかは知らないが、ひどく埃がたまつており、それだけの作業で三日かかった。

それから読書の供として、コーヒーのドリッパーと、自室のラジカセを持ち込んだ。微かに流れるBGMと、ほろ苦いコーヒー。ゆつたりとしたソファ。まさに完璧だった。これほどまでに読書に適した部屋は無いと断言できるほどだった。

そんな僕の城に彼女が訪れたのは、掃除も準備も終わり、いざ本の世界へとソファに腰を降ろした瞬間だつた。

「やあ、随分といいところじゃないか」

凜とした声に似つかわしくない、大仰な口調。そこでよつやく来訪者に気付いた僕が顔をあげると、ドアの前にすらりと背の高い女子生徒が立つていた。整つた目鼻立ちと、流れるような黒髪が印象的で、射抜くような鋭い眼がそれを引き立たせていた。口元には不敵な笑みを浮かべており、その様子からすると部室を私物化している僕を怒りにきたわけではなかった。かと見て、入部希望

者にも見えなくて、僕は首をかしげた。

「どうかしましたか？」

「ちょっとした見学だよ。潰れたはずの文芸部がまだ残っていると聞いてな

とても高校生の女の子とは思えない、堂々とした貫禄のある態度だった。彼女は部室をぐるりと見回して、満足そうに頷いた。

「良い部屋だな。気に入ったよ

「そりやどうも」

掃除をして、ドリッパーとラジカセを持ち込んだだけだが、どうやら彼女の趣味は僕に似通っているらしい。僕は少し得意になつて、突然の来訪者に気をよくした。しかし。

「入部することにした。顧問は吉野先生だつたな

「へ？」

不意打ちのような宣言に、僕は少々面食らつて彼女の顔をまじまじと見つめた。少しの迷いもない、むしろ非常に楽しそうな目で僕を見ていた。

「なんだ。新入部員の募集はしていないのか。是非、入部したいのだが

彼女の言葉に、僕は返答に困った。学校の部活動であるから、基本的に入部を拒否する権利はない。しかし、この部室は僕がようやく手に入れた、読書のための環境だった。見た印象ではそうは思えなかつたが、ここまで積極的なのは、彼女は創作活動に熱心なのだろう。

「ええと。ここは文芸部ですが、おそらく考えているような活動はしていません。部員も僕一人ですし」

もしも、本気で創作活動をする人ならば、怒るか落ち込むかのどちらかだろうと思って、そう言った。本来はそのような人間がこの部室を使うべきなのだろうが、それも仲間がいてのこと。僕一人がいるだけでは、入部する気にはなれないだろう。しかし。

「放課後にのんびり、コーヒーを飲みながら本を読む。それが活動

だと思つていたのだが

「……その通り、です」

「 そつか。なに、邪魔をするつもりはない。ただ、この環境を私も分けて欲しいだけさ」

そう言われては、断る術がない。僕はなんだか雰囲気に飲まれたように領き、実に楽しそうに微笑む彼女を見た。

「 一年の雪吹実代」という。吹く雪ではなく、雪が吹くと書いて、フブキ。以後、よろしくお願ひする

「 一年の、鷹成誠」。小鳥が遊ぶわけじゃなく、鷹に成ると書くんだ。よろしく」

小鳥遊と書いて、タカナシ（鷹無し）と読む。それも珍しい名字なのだが、僕の場合はそれより珍しいという変わり種だった。雪吹という珍しい名字も、彼女らしいと思つたほかに、親近感を覚えたほどだ。

「 どうやら、私たちの相性も良さそうだ」

「 みたいだね」

以来、僕はこの不思議な女の子と、放課後に本を読むのが口課になつた。

雪吹さんは宣言通りに入部したが、恐れていたことは杞憂に終わった。

放課後、文芸部室に訪れて、コーヒーを淹れて、本を開く。のんびりとコーヒーを飲みながら、本の世界を堪能して、下校時間になると鍵をかけて帰る。それだけだ。

最初の頃は自分の城を横取りされたような気がして、気分はよくなかつたのだが、雪吹さんは僕と同じく、ただの読書好きな学生で、読書以外の文芸部的な活動は一切しなかつた。

一学期の頃はただ、同じ部屋で本を読むだけの、お互いを空気か何かとしか捉えてない関係だったが、半年を過ぎると本の感想を言い合つようになり、一年を過ぎ、進級した今となつては、お互いの

勧める小説を読んでは、感想を言い合つのが慣例となつてきている。「ふむ。叙情感というのだろうか。なんとも後味の良い話だ。前半から半ばにかけての、底抜けに明るい話から、後半のシリアスな展開への急転直下に焦つたものの、最後の大団円はありきたりと言え、読んで安心できた。君は、中々面白い本を知つていいな」

「雪吹さんが勧めてくれた本も、いいね。ミステリとホラーは相性が良いとは思つていたけど、オカルトとミステリは一緒にたにしてはいけないと思っていた。それが、ここまで完成度の高いものになるとは思わなかつたよ」

元々が孤独な趣味なので、あまり誰かと感想を言い合つということをしなかつた。それに、雪吹さんの視点は僕とは少し違つていて、同じ本を読んでも、見ているところが違う。そんなことを話し合つのも楽しかつた。

彼女の大仰な口調と、尊大ともとれる態度に戸惑つたのは、最初だけだつた。よくよく考えれば、彼女の口調は小説のそれによく似ていて、普段から親しんでいるものである。

勧誘どころか、部活動説明会にも出席せず、めでたく新入生ゼロとなり、僕たちは相変わらず、ずっと読書をして放課後を過ごす。多分、卒業するまでずっとこのままだらう。それでいいと思つていた。

「少しば、目に見える活動をしてもらわないと困るのよ」

だが、そんな僕たちのささやかな楽しみは、顧問の吉野先生の一言で危機に立たされることになる。

「小説や詩を書くだけが文芸部じゃないから、創作活動をしろとは言わないけど。せめて感想文や、批評会なんかはしてもらわないとねえ。他の部にも示しがつかないし」

活動実績のない部活動を存続させることはできない。それは実に真つ当な理論だつたから、僕は頷くしかなかつた。

部室に戻り、雪吹さんに説明すると、「ふむ」と呟き、何が面白いのか、にやりと笑つた。

「ならば、感想文にしろ、批評会にしろ、やるしかないな。この場所は気に入ってるんだ」

「そう言つと思つたよ。ついでに、御丁寧に吉野先生が課題を出してくれた。これを読んで読書感想文を提出しろってさ」

吉野先生に手渡されたのは、一冊の恋愛小説と、その読書感想文を募集するというイベントのチラシだった。

高校生向けの企画らしく、これに応募すれば、少なくとも活動記録にはなるだらうという話だつた。雪吹さんと僕は、顔を見合わせたまま、やれやれと溜息をついた。読書感想文は確かに面倒で、あまり面白い作業には思えなかつた。しかし、この文芸部を失う」と比べれば、大したことではない。

問題は、その対象。つまり、手渡された恋愛小説のほうにあつた。タイトルは聞いたことがある。少し昔に一部で高い評価を受けていた、高校生男女の織りなす、恋愛における葛藤や苦悩を描いた作品だ。恋愛というテーマながら、そこには真剣に生きる高校生が描かれていると噂で、この手の企画が持ち上がるのもわかる気がした。

ただ、非常に残念なことに、僕も雪吹さんも、恋愛小説を今まで読んだことがないのであった。というか、そもそも、恋愛をしたことがない。思春期真っ盛りであるはずの僕たちだが、恋愛にまったく興味がなかつたのである。

この事実は、今までの僕たちにとつて非常にありがたいものだつた。若い男女が部室でずっと二人きりなのである。雪吹さんは美人なので、もしも僕が他の同年代のように恋愛に興味を持つていれば、今頃は読書どころではなかつただらう。雪吹さんとつてもそれは同じことのようで、つい先日「恋愛には欠片も興味がなくてな。おかげで読書に集中できていー」と笑っていたばかりである。

つまり、僕たちは恋愛という非常にありふれたテーマに、何ら興味を覚えることができないのである。そんな二人に、恋愛小説の感想文を書けと言われても、何を書いていいのか皆田見当がつかない。

「批評会にしないか?」

「駄目。吉野先生が用意周到に参加申し込みしちゃつたらしー」

本人は「そそかしくて、つい意志も聞かずに用紙を送つてしまつたの」と言つていたが、目は確信犯のそれだつた。活動実績のない文芸部を存続させたい一心での行動というのは、彼女の必死の表情でわかつた。故に、言えなかつたのだ。部員全員が、恋愛に興味がないので書けないなどとは。

「まあ、文章の巧拙^{こうせつ}ぐらいならば、書けるか

「それも駄目らしい。感想はあくまでもストーリーに関してらしい。ちゃんと規約に書いてあつた」

どうせ、僕たちと似たような状況の誰かが、文章に関する考察なんかを過去に送つてしまつたのだろう。最後の逃げ道すら失われて、僕たちはいよいよ迷つた。

ありきたりな一般論で固めるという手段もあつたが、吉野先生が最後に一言「やるからには、何か賞を取りなさい」と言つていたので、これも却下となつた。本気で書くしかないという状況である。

しばらく、文芸部内に静寂が訪れた。穏やかな春の日差しが僕たちの気持ちとは裏腹に、優しく身体を包んでいた。

とりあえず、読むだけ読んで、なんとか無理矢理書くしかないだろ。そんな気持ちを固めたときだつた。

雪吹さんは、まるでとんでもなく面白いことを発見したかのように、嬉しそうに口元を引き上げて、こう言つたのだ。

「それじゃあ、付き合つてみよつか

第一話 テーブルをしよう

「それじゃあ、付き合つてみよっか」

突然の申し出に、僕はしばらく呆然と、口をぽかんと開けていた。

「つまり、私たちは恋愛を知らない。だから、恋愛小説を読んでも、それに共感もできなければ、感想も書けない。ならば、恋愛を知ればいい。幸い、私たちは思春期にあり、都合良く男女のペアじゃないか。交際して、恋人らしいことをしてみれば、何やら新しい発見があるかもしれん」

雪吹さんは、まるでそれが名案であるかのようにのたまつた。言わんとするところの意味は理解できる。確かに恋愛を知ることができれば、感想だつて書けるだろ？

「けど、別に僕たちは好き合つていない。少なくとも、僕は雪吹さんを親しい人だと思っているし、好感も持つていて、それは読書仲間で、文芸部員としてのことだよ」

「奇遇だな。私もそう思つているよ」

雪吹さんは実に愉快そうに笑つて、ゆっくりとソファから立ち上がりた。音もなく、窓際まで歩み寄り、そつとカーテンを閉じる。「何事も、まずは形からだ。案外、本当に好き合つてしまふかもしないぞ？」

「形から入る恋愛なんて、聞いたことがないよ」

「当然だ。恋愛をするために交際するのだからな」

なるほど、完璧に目的と行動が逆転している。僕は少し考える。

恋愛について、興味がなかつただけに、知識は乏しい。しかし、年頃の男女の集う高校に通つていれば、恋愛の話題などいくらでも耳にする。伝え聞く恋愛とは、お互いを想い合い、心が通じた上で成り立つ、とても甘く、切なく、高尚なものだと聞く。間違つても形から入るものではない。恋に恋する乙女がこの事態を聞くと、さぞ

かし怒ることだろう。恋愛を馬鹿にしているのか、ど。

「まあ、それもありかな」

ただ、残念ながら僕は甘く切なく、それでいて高尚な恋愛を知らない。ゆえに、形からはいることに、さしたる嫌悪感はなかつた。といふか、形からでも入らなければ、一生知ることなんてできないだろう。

「よし。ならば、私たちは今から恋人同士だ。よろしく」

「ああ、うん。よろしく」

妙なことになつた。そう思いながらも、たまにはこんな出来事があつてもいいと納得してしまつ自分が決して嫌いではなかつた。じつして、この日。僕は生まれて初めての恋人ができた。否、できてしまつたというほつが正しい。

僕たちは早速行動に移した。恋人らしいことは何かと話し合つた結果、まずはデートなるものを試してみることにしたのだ。僕たちの珍しい恋愛観は、その答えに至るまでに一時間要した。

幸い、交際開始日は金曜日で、翌日に入して出かけることになつた。場所は僕が決めることになつてゐる。なんでも、そつちのほつがデートらしいから、といふことらしい。

さて、どこに行けばいいのだろうか。そう思つたが、ここには初心に返つてみることにした。そう、僕と雪吹さんが恋人となつた原因である、一冊の恋愛小説である。高校生男女の恋愛を描いたこの小説は、間違いなく参考になる。

僕は学校帰りに書店と喫茶店に寄り、一時間ほどを一杯の「コーヒーで粘り、件の小説を読破した。

「……なるほど」

僕はとりあえず小説の行動をなぞつてみることにした。まずは、明日の待ち合わせ場所と時間をメールで送らないといけない。どこに行くかも送つておいたほうが親切かとも思つたが、主人公はあえて報せなかつた。不親切なヤツだとは思つたが、折角なのでそれも

真似してみた。

翌日の朝、十一時。僕は駅前の広場にやつてきていた。勿論、人生初のデートのためである。

小説の主人公は待ち合わせの一時間前に到着して、ひどく落ち着かない様子で時計を眺めていたが、僕は五分前について、ぼんやりと雪吹さんを待つた。五分前行動は僕の美德の一つである。

「やあ、お待たせ」

かくして、十一時きつかりにやつて来た雪吹さんは、相変わらずの男らしい口調で、不敵な笑みを浮かべていた。

ただ、いつもと違う点は、彼女の服装が制服でなかつたことだろう。僕のイメージでは、雪吹さんはラフで動きやすい、シャツにジーンズというスタイルだつたのだが、その予想は大きく外れていた。淡い桃色のワンピースに、おしゃれなハンドバッグ。サンダルとハイヒールを融合させたような履き物は、確かにミユールと呼ばれていたはずだ。

「初デートではこのような出で立ちがいいという、友人の助言だ。どうだらうか？」

「イメージとは違うけど、似合つてると思うよ」

実際、雪吹さんの言動と態度さえ気にしなければ、その服装は不思議なくらいに似合つていた。いや、当然といえば当然かもしだれない。彼女は上背があり、スタイルも良く、容姿も整つてゐる。似合わない服装のほうが少ないくらいだらう。

「鷹成君も、中々映えるではないか」

「そうかな。まあ、とりあえず行こうか」

自分の服装に大した興味はない。姉に見繕つてもらつた服装を素直に着ただけである。

「そういえば、まだどこに行くか聞いてなかつたな。デートということで、それもさもありなんと思つてたが」

「うん。まあ、大した所じやないけどね。映画を観に行こうと思つ

姉に話すと、あまりにも定番過ぎて面白みがないということだったが、せっかく定番になっているのだから、それを逃す手はなかつた。小説でも、確かに女の子は少し呆れていたが、あいにくと僕たちは呆れるほどの知識も持ち合わせていない。

「おお、それはなんだか、とてもデートらしいな」

案の定、雪吹さんは呆れるどころか、納得の表情だった。

かくして、僕たちは駅前広場から歩いて五分ほどのところにある、けつこう大きな映画館に足を運んだ。現在公開中の映画は七本。ホラーと、サスペンス。アクションが一つと、ラブストーリー。それとアニメが一本。雪吹さんの好みもあるだろうし、敢えて決めてはいなかつた。

「デートらしさを突き詰めれば、ラブストーリーなのだろうが……

果たして楽しめるかは微妙なところだな

「僕もそう思う」

これはデートなのだから、デートっぽくしなければならない。それはそうなのだが、本来のデートとは楽しむべきものだとも思う。つまり、何の感想も言えないラブストーリーよりは、他の作品の方が僕たちにとってはデートに相応しい。

「サスペンスはどうかな。けつこう評判も良いみたいだいだよ？」

「うむ。そうするか」

結局、僕たちはサスペンスを選んだ。デートといつのはどうやら男が奢るものらしいが、僕たちは割り勘にした。一応、奢る覚悟と用意はしてきたが、雪吹さん曰く「奢られる理由がない」とのことだ。まったくもってその通りなので、頷くしかなかつた。

さて、映画はといふと、それなりに楽しめた。

僕も雪吹さんも、小説ばかり読んでいるが、映画も嫌いじゃない。一時間の映画の後、近くにある喫茶店に入り、しばらく感想を言い合つたりした。

「主人公の最後の行動は、何かを隠すためだったと考えられるだろう。だから、私が思うにヒロインは死んだと考えるべきだと思うのだが」

「隠すためだったという可能性は確かにあるね。けど、僕はヒロインが死んだと直結させるには、少々情報が少ないとと思う。ＤＶＤが出たら、借りてもう一度観てみようか」

「そのときは、名実共に恋人ならば一層楽しそうだな」

雪吹さんの言葉は、起こりえない未来を語っているようで、やはりこの試みには無理があつたのではないかと、ふと考へた。

僕の考えはひとまず置いておき、さてこれからどうしようかという話になつた。

初デートの目的は映画を観ることであり、それは既に達成した。感想も述べたし、もつ他にすることは見当たらなかつた。しかし、日はまだ高い。

「どれ。少しぶらつくか」

雪吹さんはまだデートを続ける気のようだ。取り立てて予定もないでの、僕は素直に頷いた。

喫茶店を出て、繁華街を歩く。休日といつともあつて、人は多い。特に僕たちのような男女の連れが目立つた。おそらく彼らは、僕たちのような訳のわからない関係ではないだらう。仲良く手を繋ぎ、微笑み合いながらゆつたりとしたペースで歩いてくる。

「私たちも、手を繋いでみるか」

「え。ああ、そうだね」

すいと差し出された雪吹さんの手を、自分の手で握る。正直なところ、女の子の手を握るのは初めてだ。柔らかくて、小さくて、細い。ドキドキするところではないが、手から伝わる温かさは嫌いじゃない。

「鷹成君は、思つていたより手が大きかつたのだな。優男のような雰囲気をこつも出してこるから、女のような手だとばかり思つてい

たが、けつこう無骨なものだ」

おそらく、彼女もはじめて男の手を握ったのだろう。僕の手の中で、彼女の手が遠慮なくもぞもぞと動き、僕の手を吟味している。「これはこれで、頼もしくて良い。折角だ、このままじばらく歩こうか」

「ああ。そうだね」

お互いの利害が一致したところで、僕たちはお互いの目を見て頷き、宣言通り、ずっと手を繋いだまま歩いた。

普段は口クに入らないブティックや、アクセサリーショップ。僕たちの中では定番の本屋。全部手を繋いだままだった。お互いの熱でしつとりと汗をかいていたが、それを気にするほど、僕たちは他人というわけでもない。少なくとも、名目上は恋人同士。相手の汗を嫌がる道理はなかつた。

結局、気付けば夕方になつていた。雪吹さんは部室の中よりも明るく、楽しそうだった。僕も不慣れな繁華街だというのに、そんなことが気にならないほど、退屈をすることなく楽しめた。

もしも、恋愛感情を理解できる人間だつたならば、僕は真剣に雪吹さんを好きになつっていたかもしれない。こんな日が続くのならば、確かに恋愛は素晴らしいものだ。

このママゴトのような関係が終わるのは、おそらく感想文が完成した、その日だろう。僕たちは、そのために交際しているのだから。だけど、もしも許されるのであれば、この関係をもう少し続けていたい。繫いだ手はこのまま、離れないでいてくれないだろうか。恋しいとは思わないが、この手が離れるのが惜しい。

「鷹成君。ここがお互いの家から最も近い場所ではないか?」

あれこれと考えているうちに、僕たちは繁華街を抜け、住宅街を歩き、家のすぐ近くに来ていた。雪吹さんの家と、僕の家は割と近く、徒歩で十分といふところだ。

「今日は楽しかつた。そうだな、初デートの最後らしく、何かしら

の記念「らし」いものがあればいいのだが」「記念?」

雪吹さんの言葉に、僕は首をかしげる。

「思い出といつほどの意味さ。私たちの初デートとして、思い出に残る何かがあれば、それを思い返せるだらう。そういうことを大事にするのが、恋人というものじゃないか?」

確かにそうなのがもしけない。だけど、もう繁華街を抜けて、今は住宅地である。何かを買うにしては、少々場所が悪い。

ならば、形として残るものでなくともいいかもしけない。そう、たとえば。

「キス、とかいうのはどうかな。実に恋人らしい気がするんだけど」「ほう。それはまた、大胆といつか。確かに手を繋いではみたが、親と手を繋ぐことはあつた。しかし、キスともなれば、これは確かに恋人同士でしかしないことだな」

僕の提案に、雪吹さんは意外なほどに乗り気だつた。

彼女の言うとおり、キスという行為は、あまりにもダイレクトに恋人という関係を表している。僕たちのような、真似事の恋人同士が、はたしてしていいものなのかもわからない。

「もしも、この先に本当に好きな人が出来たときのために、とつておくのもいいかもしけないけどね」

少し不安になつて、僕はすぐに反対案も出した。だが、雪吹さんは首を横に振り、僕の顔を真正面から見た。

「このままだと、一生出来ないさ。それに、もしも好きになるとしたら、私は鷹成君を好きになるだらう。ならば、きっと良い思い出になる」

ふと、少し嬉しくなつてしまつた。雪吹さんも、僕と同じ気持ちだつたのだ。確かに僕たちは、恋愛感情を知らない。けれど、もしも知つていたなら、間違いなく相手を好きになつていただろうとも思つ。

「じゃあ、きっとこの行動は、間違いではない。いや、いつか僕た

ちが恋愛を知つたとき、きっと間違いでなくなるだらう。
僕は右手を繋いだまま、左手で、そつと、雪吹さんの肩を抱きよ
せた。意志の強そうな瞳が、僕の目を真っ直ぐに見てくる。そここ
怯えや不安の色はない。

「いわゆる、ファーストキスというやつだな。鷹成……いや、誠一
に捧げるのならば、今の私には本望だよ」

「……僕も、実代みじゅとしたい」

ああ、これではまるで。

本当の恋人同士のようではないか。いつか観たドラマのようない
ンシーンに、今僕たちは立つてゐる。すつと、実代の目が閉じられる。薄べリップを塗つて
あうづ、瑞々しい唇に目が奪われる。恋じやない。戀でもない。けれど、僕たちはキスをする。ただ、
お互いがそれを求めたから。

ゆつくつと彼女の唇に、自分の唇を重ねる。
とても柔らかく、あたたかかった。

第二話 心と体を重ねよう

僕たちの日常は、以前と何も変わらない。

雪吹実代ふぶきみつる という女性と交際することになつて一週間。相変わらず、僕たちは本を読むだけだ。事の発端である恋愛小説の感想の〆切は当分先なので、僕たちはまだ焦つてはいない。

「誠一。以前に借りた小説を、もう一度貸してくれないか」

「うん、いいよ。僕も実代のをまた借りたい」

日常という大雑把な括りでは、確かに変わつていない。けれども、些細なことに目を向けるならば、変わつたと言わざるを得ないだろう。

誠一。実代。

お互たがいの名前を呼び合つようになつた。

「そろそろ帰かるつか」

「そうだね」

少し遠回りをして、二人で帰るようになつた。手を繋いで。

端から見れば、それは紛れもない恋人同士なのだろう。一人きりの部活動が、恋に発展した。事情を知らない人間からすれば、それがあまりにも納得のいくものに思えるというのが、僕の予想だ。

実際に、実代と一緒に帰るのは楽しかつた。本を読むという趣味以外に接点がなつかったはずの一人が、今では手を繋ぐという、あまりにも直接的な接点を持つてゐる。

ただ、聞いていた恋愛とは違う。胸がどきどきする。切なくなる。そななあまりにも陳腐なフレーズを、僕たちは感じることができなかつた。

「付き合つて一週間経つが、誠一はどうだ。私としては、樂しくはあるが伝え聞く恋愛とは違うというのが感想だが」

「概ね同じかな。手を繋ぐのも、キスをするのも悪くないというか、氣分が良いんだけど、多分、他の人のような感覚じゃないんだろう

な、と思つ

キス。その単語を口にした回数と、実際に唇を重ねた回数の、どちらが多いのだろう。

いわゆるファーストキスを経験してから、僕と実代は何度か放課後の文芸部室で唇を重ねてきた。お互いがその感覚が案外気に入ってしまい、人目を憚る必要のない場所にいる時間が長いものだから、半ば当然の成り行きだった。

名実ともに恋人同士。周囲からは交際していると思われているし、僕たちも交際していることをお互いに認めている。手を繋ぎ、キスをする。行為も恋人のそれである。名も実も伴っている。しかし、本来は最も大切であるはずの、お互いの気持ちだけが、重なることはないようだった。

「いつも、身も心も重ねて、というのもアリかもしないな」

ふと、実代が呟いた。いつもの堂々とした、自信に溢れた声ではなく、僕が聞き取れなければそれでいいというほどの、独り言に似た呟きだった。

僕は少し戸惑つた。それはつまり、セックストークのことを指しているのだろう。

恋人同士がすること。僕たちの年齢ならば、特に男子にとつては最終目標と言つても過言ではないもの。

断つておくが、僕は恋愛を知らないだけで、性欲は人並みにある。我ながらよく集めたモノだと思うほどの小説が詰め込まれた本棚の影に、エロ本が数冊、仕込まれている。そういう意味では、実代の言葉は実に興味深い。

改めて実代を見ると、すらりとした上背と、整った目鼻立ち。スタイルもいいと思う。

もし、彼女とセックスができるのならば、それを断る道理はなかった。

「……いいのかな？」

ただ、相応の倫理観も僕は持っている。交際期間一週間。少し早

い氣もするし、恋愛感情という根本的なものを理解できない僕たちが、果たしてその行為に及んでしまってもいいものか。

「一応、校則では認められない。良い悪いで言えば、悪いのだろう。正直なところ、不安もある。最初はひどく痛いと聞くし、誠一にも経験があるように思えない。リードなど期待できないしな。」
「ういう性格なので、羞恥心はさほど感じないが、わざわざ痛い思いをしたくはない」

「そりやあ、そうだろうね」

「ただ、私も興味がないと言えば嘘になる。慣れれば気持ちいいと、いう話も聞く。女の幸せの一つに掲げる人間もいるらしい」

実代は迷っているようだつた。提案するほどなのだから、嫌ではないのだろう。しかし、キス以上に、「はじめて」を大切にしなければならないものだと聞く。

「誠一はどうだ？」

「正直に言えば、興味はある。有り体に言えば、男なら誰でも一度はやりたいことだと思つよ。まあ、恋愛云々ではなく、性欲に従つている氣もするけど」

正直に言つてしまひのは、僕の美德であり、悪癖でもあると思つ。もし、ここで恋愛らしいことだと断言していれば、実代は意を決していたかもしねりない。

「なるほど。では、また機会が訪れたときにも、とこいつことによつよ。どのみち、今からするというわけにもいくま」

実代は淡々とそれだけ言つて、それからしばらく、僕の顔を見なかつた。

もしかしてけつこう恥ずかしかつたのではないかと氣付いたのは、家に着いて、私服に着替え終えた後だつた。

本来なら、家に帰つた僕はつるさい弟たちの相手をしながら、宿題に勤しむところだが、今日は違つた。実代から電話があつたのだ。
『家に帰ると、家族が不在だった。今日は帰らない』という書き置き

を残してな。その、なんだ、機会が、来てしまつたよつだ

「あ。ああ……そう、みたいだね」

先ほどの会話が脳裏に蘇り、僕は大いに慌てた。実代にしては随分と歯切れの悪い言葉が、電話越しに彼女の緊張を伝えている。しばしの沈黙が続く。恋人同士の電話ではないな、と思った。

『待つている』

「……うん」

不意に呴かれた実代の言葉に、僕はほとんど何も考えずに頷いていた。

それから、慌てて下着から全部を着替えて、転げるようになに家を飛び出した。自分でもよくわからないが、とにかく急いだ。呼吸が乱れるのも、汗をかくのも、全部走っているせいにできるから、かもしけなかつた。

実代は、学校帰りに別れる場所で待つっていた。デートでもないのに、この前と同じ、お洒落なワンピースを着ていた。

「やあ。早かつたな」

言葉はいつもの彼女のものだつた。しかし、微かに頬に朱が射している。恥ずかしくないはずがない。今から僕たちは、色々な問題を蹴り飛ばして、セックスをしようというのだから。

実代の先導で、僕は彼女の家に通された。手は繋がなかつた。

高級マンションの一室。そこが彼女の家で、僕の緊張は余計に高まつた。通された実代の部屋は、女の子にしてはあまりに簡素といふか、自分の部屋と大差がなかつた。

ベッドと、クローゼットと、勉強机。後は本棚が幾つも。それだけだ。趣味と呼べるものは読書しかない。実代らしいと、少しだけ安堵した。

「さて。では、早速だが……しようか

「あ、ああ。そうだね」

何をすればいいのか。僕の頭はいよいよ混乱した。アダルトビデオを参考にしようにも、頭が真っ白になつて、何も思い出せない。

実代は僕の顔をじっと見据えたままだった。

自分でも、鼓動が早くなるのがわかる。息が荒い。僕は今、何をしようとしているのだろう。恋愛感情を知らない僕が。いや、僕たちが身体を重ねる。それは果たして許されるのだろうか。さっきから考えていたことだけが、ぐるぐると頭を駆けめぐる。

「実代……僕は、わからない。本当に、こうしていいのかな。君は後悔しないで済むのかな。僕はとも、冷静でなんていられない。傷つけてしまうかも、しれない」

熱に浮かされたように、言葉が口からあふれ出す。初体験を目前にした、健全な若者男子の言葉ではなかつただろう。素直に、性欲に従つてしまえば、それでいいはずなのに。何故、僕は立ち止まつてしまふのだろうか。

今、このとき。僕が実代を愛していられたならば。そう願わずにはいられなかつた。

「……誠二。わかつていないうだから言つが、君は喋るたびに、私の選択が間違つていなかつたと確信させていい」

「へ？」

「男が盛つて、空気もムードも無いまま押し倒された友人の話をよく聞く。それに比べ、君は愛していないうだの私を、心配してくれている」

実代は、穏やかな顔で僕を見ていた。今までとは違う。不敵な感じがする笑みはどこかに消えて、ただ、優しいだけの笑顔がそこにあつた。

「確かに、私たちは恋を知らない。愛しているなんて、実に嘘くさく聞こえる。けれど……」

実代はそこで一旦言葉を区切り、そつとキスをした。今まで一番短いキスだつた。

「嘘でいい。好きだと、そう言つてくれれば、私は……一生後悔なんてしない。誇りに思つて生きていぐみ」

はじめてのセックスは、想像していたよりもあっさりと終わつた。それだけ、僕は夢中だったのだろうか。よくわからないが、痛みを堪える実代にキスをしたときに、彼女の表情が和らいだことだけは、妙に脳裏に焼き付いている。

気持ちが良いとか、そういう感覚はよくわからなかつた。ただ、熱い。それだけだ。

「……優しく、してほしかつたものだ」

「じめん」

実代としての感想は、ひたすらに痛かつた、とのことだった。お互いがはじめてで、上手くできるはずがない。やはり、するべきではなかつたのだろうか。

ただ、実代の仕草がかわいいと思つてしまつたのも、抗えない事実だつた。美人だとは思つていたが、今までかわいいと思つたことはなかつた。決して、得たものがないわけではない。

「……痛かつたが、決して悪い気分ではなかつた。それにな、好きだと言われるたびに、痛みが少し和らいだ。キスをされるたびに、気持ちよくなつた。やはり、後悔などしていない。それどころか、嬉しくすらある」

照れたような笑みを浮かべ、実代は毛布で身体を包み、僕の頭をくしやりと撫でた。

「誠二……この気持ちが、恋、なのか？」

「わからないよ……ただ」

ただ。

もしそうならば、どれだけ幸せなことだらうか。この感覚が恋と呼んでいいものならば、僕は今すぐにでも、恋愛偏重主義者になる自信がある。

セックスの快感に取り憑かれたわけじゃない。一人が穏やかな笑みを共有できる、この感覚。リラックスなんてしていののに、と

ても落ち着けるこの空気。

胸が切なくなるという感覚など、未だにわからない。だけど、これが恋ならば。

「もし、そうなら。僕は、とても幸せだよ」

僕はそう呟いて、実代と唇を重ねた。

第四話 のんびりじょう

微かな音で流れる、ラジカセの安っぽいジャズの音。

「ポポポと音をたてる、『コーヒーのドリッパー』。

春のそよ風はカーテンを揺らして、頬を撫でる。これ以上ないほど、最高の環境だと僕は思った。ひたすら穏やかで、心ゆくまで読書を楽しむことができる。文芸部という場所を手に入れることができて、本当に良かったと思つ。

「すまない、遅れた」

僕が感慨に浸りながら、『コーヒー』を淹れているところに、実代が相変わらずの不敵な笑みで現れた。恋も知らないままに交際をはじめ、あらうことか身体まで重ねたのが昨日。僕たちは土曜日だとうのに高校の文芸部室にやつて来ていた。

初デート。ファーストキス。初体験。

恋人がすることを通り一遍試してみた僕たちは、改めて、そもそもその発端である恋愛小説を読んでみることにしたのだ。もしかすると、何かしらの感銘を受けたり、共感を覚えるかもしれない。

「コーヒー、いるかな？」

「ああ、いただこう」

鞄を置き、一冊の文庫本を取り出した実代に、湯気の立つたコーヒーを渡した。

この一年で、僕たちはお互いに小説について意見を多く交わし合つてきた。故に、お互いの小説の趣味は熟知しているつもりだが、それと同じくらい、コーヒーの趣味も知っていた。

実代は、女性にしては珍しいほどの苦党だ。口がひん曲がつてしまふのではないかと思うほど、苦いブラックコーヒーをこよなく愛している。僕も酸味より苦味を好むが、彼女の好みに合わせるのは無理があった。結果、僕が美味しいと思つ限界の苦味にしている。「これもいただくよ」

実代はカップを机に置き、ドリッパーの近くに置いてある角砂糖とミルクを手に取った。僕が知る限り、彼女がそれを「コーヒーに入れるのを見たことがなかった。僕も普段は使わないが、疲れているときなどは、甘いものも欲しいので、一応置いてあるのだ。

「珍しいね。実代はブラック派なのに」

「破瓜というのは、思っていた以上に難儀でな。一晩経つても、痛みがたまにズキッと来る。おかげで、あまり眠れなかつた」

「そ、そうなんだ。それは、なんというか、大変だね」

男には決してわからない痛みだと思う。謝るのも彼女の覚悟に対して失礼かと思い、ひどく曖昧な言葉で茶を濁すことしかできなかつた。

「異物感というかな。まだ、中に入っているような感覚がある。痛みよりも、むしろこちらが寝不足の原因かもしだ。もしかすると、君は立派なものを持つているのかもしだれないな」

昨晩のことを棚に上げるならば、実代の言葉はセクハラだった。どう答えていいのかわからず、僕はソファに座り、コーヒーを啜つた。

「私はそれなりの体型を維持していたし、先日の身体測定では周囲に羨まれた。そこそこのものと自負していたが、どうだつた?」

昨日の恥じらいはどこへやら。実代は好奇心なのか、僕をからかいたいだけなのか、昨晩の話を続けた。

「比較対象が無いから、わからないけどね。綺麗だと思ったよ。それに、可愛かった」

僕はつとめて冷静を装いながら、思わず脳裏で昨日の実代を思い出してしまつた。

荒い息。汗に濡れた、火照った肢体。とろんとした瞳。

目の前に悠然と佇む人間と、同一人物とはとても思えない。今の実代は綺麗という言葉があてはまるが、昨日は確かに、可愛いと思つた。

俗な言い方をすれば、今は見惚れるだけだが、昨晩はそそつた。

「可愛いと言われたのは、はじめてかもしれないな。なるほど、悪い気分じゃない」

実代は満足そうに頷いて、コーヒーに角砂糖を一つ落とした。ティースプーンでそれをゆっくりと搔き回し、ゆっくりと口をつける。「じゃあ、反対に聞くけど。僕はどひだつたかな。別に自負するほどのものはないけど」

どう反応していいかわからず、僕は彼女に倣つて尋ねてみた。実代は逡巡してから、ふとにつこつと笑った。

「普段の君は、落ち着いていたが、昨晩はとても一生懸命だつた。なんというか、可愛いと思つほどにな」

「……可愛いと言われたのは、はじめてだよ。複雑な感情つてやつかな」

呵呵（かか）と彼女が笑うのを見て、次はもつと冷静にならうと思つた。もつとも、昂ぶる気持ちを抑えては、そもそも行為にならないのだろうけど。

「しかし、昨日を鑑みるに、感情の起伏がないわけではないのだな。いよいよ読書をはじめようかと思つていると、実代がぽつりと咳いた。

「どうこうこと？」

「誠^{せいじ}」は、私の前で声を荒げるどころか、大声で笑つたことすら無かつたからな。昨晩、必死な顔をして、熱に浮かされたように好きだと連呼してくれた。私も、自分があれほど乱れるとは思つていなかつた。感情が薄いから、恋愛を理解できないのかとも考えていたのだが、それはなさそうだ

「なるほどね」

確かに、僕も実代も滅多に声を荒げることはしない。苛立つこともあれば、悲しんだり、喜んだりもするのだが、それらを表に出すのが得意ではないだけだ。

つまらない男。空気が読めない。そんな自分の風評を聞いたこと

ぐらいはある。やはり人よりは起伏が大人しいのかもしれない。多少なり悲しくはあったが、己の行動を見れば至極当然で、仕方ないと、それきり考えなくなってしまったのだから。

おそらく、実代も同じだと思つ。掴み所のない性格や、大仰な言い回し。すっかり慣れてしまつた僕は気にもならないが、何を考えているのかわからないとか、不気味だとか、近寄りがたい人間だと言われているようだ。

勿論、最低限のコミュニケーションは取つてゐる。クラスには友達もいる。実代は性格や言動はともかくとして、美人だから、男連中には受けが良い。実際、曲がりなりにも交際をはじめてから、羨まれることが幾度かあつた。

「女に興味がないフリして、ちゃつかりしてゐるな、チクショウ」

興味が無い故に交際に至つたと説明するのも面倒で、言われるがままにしておいた。いずれ、恋愛を知ることができれば、そのときには彼のぼやきが、眞実になるかも知れないと、どこかで願つていたのかも知れない。

「この一週間で得たものは、人が言つ恋とはかけ離れた、ひたすらに穏やかな心地よさと、好いても、好かれてもいない恋人。失つたものは、処女だというのだから、これを小説にしても、面白いかもしれないな」

実代はさぞかし楽しそうに、口元をにやりと緩める。確かに、この二人の関係を小説にしたら、面白いかもしれない。ただ、僕には最も重要であるう、結末が想像できなかつた。

それよりも、この期に及んで、話を小説に持つていく実代は、流石はこの珍妙な部室にいるだけのことはあると、得心した。何よりも、小説ありき。實に僕たちらしい。

「実代は、どんな結末を考える？」

少し興味が湧いて、この話を続けてみることにした。恋愛の話題よりも、よほど性に合つてゐると、内心で苦笑する。

「そうだな。単純な好みで言えば、このまま恋を知らずに終わるの

が面白い。自分の知らぬ感情を求める、偽りの関係を続ける。疑問を持たないわけではないが、打破するだけの答えを持ち合わせることができず、当初の目標は達成されることはない。しかし、一人の曖昧な関係は続していく。心情を巧く読ませる文章ならば、是非、拝読したいものだ

「ひどく私小説的なものになりそうだね」

「突然恋愛に目覚め、笑顔で手を繋ぐ結末よりは、よほど読み応えがあるだろう?」

実代の言葉に、僕は素直に頷いた。あまりに陳腐な大団円も嫌いではないが、小説の面白さを追求するならば、この物語はバッドエンドで締めるべきだ。アメリカの作家で、シユールコメディを得意としていたカート・ヴォネガットは、創作講座でそのようなことを言っていた。きっと、世間一般では大団円が望まれるだろう。ただ、氏の言葉を借りるならば、物語が肺炎に罹^{かか}ってしまう。

「創作意欲があれば、筆を執るのだろうが。いやしかし、もしそうであれば、このような話は考えなかつたかもしぬ。私小説であれば、なおさらだ」

私小説は、作家自身の経験や感情をダイレクトに表現する。大正の時代に花開いたこのジャンルは、作者を主人公としたノンフィクションと言つても、あながち外れではない。田山花袋の『蒲団』はあまりにも有名だろう。

創作意欲が無い文芸部員だからこそ起こつたこの状況は、決して私小説として発表されることはない。実代はそう言つたのだろう。「今からでも、実代が書いてみたらどうかな。そうすれば、感想文は必要なくなる」

「昨晩のことも私小説として書くというのか 文芸部存続どころか、停学がオチさ」

「……ああ、確かに」

昨日、実代も言つていたが、不純異性交遊は校則で禁止されているのだった。これでは私小説が、ただの暴露本に成り下がる。それ

に、僕の感情いくらが起伏に乏しいといつても、自分たちのセックスを文章で披露できるほど羞恥心が欠落しているわけでもない。「誠」が書いてみるのはどうだ。昨日のことは、妄想とでも説明しておけばいい」

「昨日が印象的すぎて、ただの官能小説にしかならないよ。どのみち、よくて停学つてところじゃないかな」

僕が答えると、実代は再び呵々と笑った。

結局この日、手に取つてまでいた文庫本は、ついぞ開かれることがなかつた。

僕たちは安っぽい音色のジャズをBGMに、コーヒーを飲み、何の益にもならないことを、ずっと話し続けていただけだ。

部室に来て小説を読まなかつたのは、初めてのことだつた。

「ヴォネガツトの創作講座

- 1 赤の他人に時間を使わせた上で、その時間はむだではなかつたと思わせること。
- 2 男女いすれの読者も応援できるキャラクターを、すくなくともひとりは登場させること。
- 3 たとえ「ツップ一杯の水でもいいから、どのキャラクターにもなにかをほしがらせること。
- 4 どのセントランスにもふたつの役目をさせること
- 5 登場人物を説明するか、アクションを前に進めるか。
- 6 サディストになること。どれほど自作の主人公が善良な好人物であつても、その身の上におそろしい出来事をふりかからせる

自分がなにからできているかを読者にさとらせるため」。

7 ただひとりの読者を喜ばせるように書くこと。つまり、窓をあけはなつて世界を愛したりすれば、あなたの物語は肺炎に罹つてしまつ。

8 なるべく早く、なるべく多くの情報を読者に与えること。サスペンスなどくそくらえ。なにが起きているか、なぜ、どこで起きているかについて、読者が完全な理解を持つ必要がある。たとえばゴキブリに最後のなんページかをかじらせてしまつても、自分でその物語をしめくくれるようにな。

第五話 ときどき喧嘩もしてみよう

一体、恋愛とは何ぞや。思い浮かぶのは得てして曖昧で抽象的な言葉でしかない。

実感の伴わない言葉に、果たして意味などあるのだろうか。そして、その意義がわからないままに続ける、実代との関係とは、何なのだろうか。

などと考えてみたものの、実代の唇は柔らかくて、あたたかい。一体どういう仕組みなのかなはわからないが、キスというのは随分と心地がいいものだ。

ああだ、こうだと考えるよりも、唇を重ね合わせたほうが、よほど建設的なんじやないだろうかと、思考の放棄に至るぐらい、僕と実代は部室で長いキスを交わしていた。

「ん……はふう」

普段なら決して聞くことのできない間の抜けた実代の声は、それだけで蠱惑的だ。気付けば、僕の右手が自覚もないままに、実代の胸元をまさぐっていた。

「……だ、駄目だ」

実代は微かに僕を押して抵抗するが、それが一層、僕の嗜虐心に火をつける。文学少年らしく、理数系の科目は苦手だが、アングペア抵抗が1を下回ると、力が上がっていくことぐらいは知っている。微弱過ぎる抵抗は、欲望を肥大させるのだ。

「そ、それは、アンペアの基準を1に据えているからだ。基準が0だと都合が悪かつただけで、決してこの状況の説明として正しくな……ふあっ！？」

「燃えさかる火に、ちょっとの水を垂らしたところで、火の勢いは増すばかり……つていうほうがよかつたかな？」

律儀に訂正する実代に、さらに指を這わせる。妙に気障な会話が僕たちなりの照れ隠しであることはお互い承知だろうが、つまるところ

「ふ、照れてはいるが、嫌がってはいわないわけで。

「……優しく、してくれ」

実代はそう呟いて、僕の胸に顔をうずめるのだった。

さて、そんなふうに割と順調に進んでいた交際が一週間を過ぎた辺りで、実代が一つの提案をしてきた。時間は放課後。場所はいつもの通り、文芸部室。

「私たちはこれまで、恋人らしいことをしてきたわけだが、まだやつていなかつた」

この言葉に僕は少し驚いた。もう、全部やりつくしたと思つていたからだ。

デートにキスにセックス。手も繋いだし、のんびり喋つたりもした。僕の知りうる限りの恋人らしい行為は、これで全部だ。一体、他に何があるというのだろうか。

「わからないのも無理はない。およそ、私たちには無縁だったからな」

最早トレーデマークのような不敵な笑みで僕を見据える実代だが、実は最近、その不敵な笑みから感情を読み取れるようになつてきた。別に細やかな仕草で判別しているわけではなく、雰囲気だけなのが、これが割と当たる。遂に恋人らしさもここまで来たかと嬉しくなるが、肝心の感情だけが求めるところに追いついていない。

ちなみに、今の実代はあまり喜んでいる様子ではない。むしろ、少し迷つているという感じだ。はて、恋人らしいことを見つけた割には妙である。

「折角だから、挑戦してみたいけど、難しいの？」

「う、うむ。おそらく、私たちにとつては、かなりの難関だ。その、せ、せつぐすよりも」

実代は普段の態度とは裏腹に、割と純情というか、いわゆる下ネタ系に弱い。セックスという単語を口にするだけで内心では恥じらつているようなのだ。

しかし、そのセックスよりも難関となると、これは相当である。僕たちのようないい似非と呼ばれても仕方ない関係に、果たしてチャレンジすることが許されるのかも疑問だ。

「……とつあえず、聞くだけ聞くこうかな」

「ああ。まあ、聞けば理解できるだろう。まだしていいのは、喧嘩だ。つまるところ、痴話喧嘩というやつだな」

実代の言葉に、僕はがくっと姿勢を崩した。一体どんな難しいことが待ち受けているのかと思つたら、たかだか喧嘩だつたか。

「……いや。喧嘩、か」

あまりにも有り触れた言葉に思わず脱力してしまつたが、よくよく考えてみれば、確かに難しいかも知れない。

僕と実代は仲が良い。気が合つし、趣味も合つし、お互いの話をよく聞こうとする。意見が衝突することもあるが、そうなると、二人とも冷静に意見を交換して、話を前に進めようとするタイプである。喧嘩どころか、そういう意見の食い違いが楽しくて、積極的に相手と違う意見を見つけようとまでしてしまつほどだ。

お互いがそれを楽しんでいる節があるので、本来ならば喧嘩に發展するようなことも、笑顔でやつてしまつわけだから、そういう意味では、セックスよりも難しい。

「でも、わざわざすることじやないよね？」

どうせなら、喧嘩などしないに越したことはないよつて思つ。確かに痴話喧嘩という言葉があるぐらいなのだから、喧嘩というのは恋人らしい行為なのかもしねいが、多くの恋人達はそれを回避しようとするのではなかろうか。

「私とて、誠一と喧嘩などしたくないし、そもそもどうすれば喧嘩になるのかも見当がつかない。罵倒したところで、誠一はそれを受け止めてしまうだらうしな」

実代は苦笑して、コーヒーに口をつけた。なるほど、そこまでわかつていてなお、提言するといつからには、何かしらの展望が望めるということか。

「雨降って、地固まるとも言えれば、わかりやすいか。喧嘩をして、お互いの生の感情をぶつけ合つた後は、より強固な絆で結ばれる。今までは行為というもので恋人らしくあるひうとしたが、今度は感情だから、今までよりも一層、近づけるよつて思つ」

「言われてみれば、確かにその通りである。だが、しかし。

「僕たちは、一体何について喧嘩すればいいんだろうね？」

「さつきからそれを考へているが、何を話したところで喧嘩になりそうにない。いやはや、年中喧嘩をする恋人もいると聞くが、今だけは羨ましい」

結局、その日はとうにか喧嘩に発展しないものだらうかと、お互に相手の駄目なところを指摘する流れになつたが、お互いが「確かに」とか「気をつけるよ」と、すぐに首肯してしまつので、ちつとも喧嘩にならなかつた。それどころか、今まで微かに気になつていた点が改善されてしまい、ますます喧嘩から遠ざかつてしまつたほどだ。

「どうやら、倦怠期というのを待つしかないか

「来ればいいんだけどね」

望んでいては、絶対にやつてこないだらうと思ひながらも、そう呴かずにはいられなかつた。

しかし、案外チャンスというものは早くやつてくるものだ。セックスをする機会を窺つたら、当日中に叶つてしまつた僕たちである。数日を間に挟んだだけ、喧嘩のほうがやはり難関だつたのだろう。「誠」。まさか君が浮氣をするとは思わなかつた。見損なつたぞ」「だから、あれは姉さんで、受験でピリピリしてたから、散歩に連れ出しだけだつてば」

「そのような言い訳、聞きたくはない。姉と仲が良いからと言つて、腕を組むはずがないだろ。確かに私たちは恋人として間違つているかもしれないが、きちんと恋愛ができるのなら、そう言えればいい。私の身体が目当てだつたか？」

「だから違うって。姉さんが貧血起こして、寄り添つて歩いただけだつて。大体、身体目当てつて言うけど、そもそも誘つたのは実代じゃないか」

絶対に喧嘩はしないと思っていたのだが、いざ始まつてしまつと止まらない。僕がどれだけ誤解だと言つても、実代はそれに耳を貸さず、終いには「もう別れる」とまで言い出す始末である。

「今、別れたら文芸部はどうするの？」

「知らん。浮気性の女好きと一緒にいると思つと虫酸が走る。廃部でいいだろう」

「……へえ。浮気も女好きもどうでもいいけど。最後のはちょっと、許せないね」

なるべく冷静に誤解を解こうと思つていたが、あらうことか、実代が言つてはならないことを言つてしまつた。

文芸部が廃部になるだと。僕がようやく見つけた、最高の読書の環境を、実代は要らないというのか。

「ものの弾みだとしてもね、廃部でいいなんて言つては駄目だ。こ¹がどれだけ、僕にとつて大切な場所か、実代はわかつていられないみたいだね。ずっと探していたんだよ。落ち着いて、心ゆくまで読書ができる場所を。それに、僕たちはここを守るために交際を始めた。実代は、そのために処女まで捨てたじゃないか。実代にとつてもそれだけ大切な場所だつたはずだ。そこまでしているのに、要らないなんて言つのは駄目だ。この場所もだけど、自分ももっと大切にしないといけない」

長い台詞を一息で喋り、実代の様子を窺う。何か言葉を探すように、視線を空中に漂わせているが、まだ折れる様子はない。ならば、わからせてやる。僕がいかに、この場所を大切にしていて、それと同じくらいたく実代も大切に思つてているのかを。

「……というわけで、文芸部は絶対に廃部にしない。実代と一緒にいるのは楽しいし、実代も楽しんでいると思うから、実代と別れる

のも嫌だ。確かに恋愛とは少し違うかもしれないけど、僕たちにはお似合いだと思うし、先には本当の恋愛が待っているかもしない。そもそも、事の発端の誤解は今度、家に来ればわかるさ。姉さんを紹介する

ああだこうだと、僕が喋ること十数分。すっかり胸の内を吐き出して、思わず大きく一息ついた。さて、実代はどうしただろと彼女の様子を窺うと、何故か優しく笑っていた。

おかしい。何故喧嘩をしている最中なのに、彼女は笑っているのだろうか。

不敵な笑みなら理解できる。あの余裕のある表情で見られると、少し萎縮してしまつ。喧嘩のときの表情としては効果的だ。しかし、まるで僕を見守るような笑顔といつのは、これいかに。

「……実代？」

「まさか、そこまで私のことを考えてくれていたとは驚きだよ。いやはや、我ながら中々の役者だと思ったが、誠二のまさしく心からの言葉に、思わず素に戻つてしまつた。シナリオ通りならば、ここから私の屁理屈が並ぶはずなのだが……返す言葉がないとはこのことだ」

実代の言葉が理解できずに、首をかしげる。

役者。素に戻る。シナリオ。

まるで、実代が何かを演じていたかのような言葉だ。もし、そういうとするならば、この喧嘩らしきものは

「どうだらうか。誠二が掛け値無しに怒るなら、文芸部のことだと思つてな。ただ、いきなり廃部にしようと言つては、怪しまれて終いだらう。そこで、昨日偶然見かけた様子を利用して、別の話題から入つてみた。まがりなりにも、痴話喧嘩を体験できたと思うのだが」

やられた。

そうだ。よくよく考えてみれば、実代が意固地に浮氣だと言い張る時点でおかしかつた。僕が説明して、納得がいかなければ、納得

のいく証拠を求めるだろ？。それもなく、僕の意見を封殺しにかかる時点で、実代の思惑に気付くべきだった。

「……ひどいよ。僕が独り相撲をやってただけ、か」

「いやいや。あながちそうでもなかつたぞ。誠一が文芸部を大切に思つてゐるのは知つていたが、まさか、私もあそこまで大切に思つてくれているとは、本当に驚いた。これが、相手の生の感情といつやつなのだな」

嬉しそうに言わわれては、こちらも返す言葉がない。

ただ、本気で廃部になればいいと考えていたわけではなかつたようだ、一安心だ。それに、これも実代なりに考えての行動だったのだろう。事前に僕を騙す相談を持ちかけられては、僕が騙されるはずがない。

「……まあ、それでも騙したことには違ひない。今後のしこりにしないためにも、誠一も何らかの報復で返してくれ。一応、拳骨ぐらいいの覚悟は決めてきた」

実代はふと表情を引き締めて、真っ直ぐと僕を見た。

彼女は、本当に解つていいのだろうか。そういう態度が、いつそう報復なんてものを遠慮させることに。

ただ、一度決めた覚悟を無碍にしないのは、やはり僕の美德の一つである。報復とまではいかないが、せいぜい、悪戯ぐらいなら許されるとと思う。それに、僕だけ生の感情でぶつかつたのも恥ずかしい。

「じゃあ、目を瞑つてくれないかな？」

「む。ゲンコかと思ったが……視覚を奪つとは恐怖心を煽るのが上手いな」

実代はちつとも怖そな素振りを見せずに、目を瞑つた。僕はそれを確認すると、なるべく音を立てないようにつむつと実代に近づく。

「まさか、キスというオチか。中々に粹だが、それでは手打ちにならないぞ？」

実代が僕の気配を察してか、先手を打つ。しかし、残念ながら外れである。キスは別にこの機会でなくてもできる。

僕は黙つて、さらに彼女との距離を詰める。お互いが手の届く程度の場所まで近づき、そこで勢いよく、実代のスカートをめくりあげた。

「 きやあつ！？」

ふわりと舞うスカート。真っ白な太腿と、微かに見えた薄桃色の下着。そして何よりも、真っ赤になつてスカートを抑え込む実代の様子。

「うん。生の感情っていうか、生の表情だけど、悪くないね」

僕が実代を真似て不敵な笑みを浮かべると、彼女は頬を赤く染めながらも、ペしペしと僕の胸板を叩いてきた。その様子がなんだかかわいくて、ぽふぽふと頭を撫でる。

なるほど。これだけのことでの、昨日よりもなんだか幸せな気分になつてくる。

たまには、喧嘩をしてみるのも悪くはないかなと、僕は思った。

第五話 じわじわ喧嘩もじこなよつ（後書き）

ちょっと趣向を変えて、ラヴコメ風味の話にしてみました。
本領発揮と気張つてみたのですが、実代にグッときてくれたなら嬉しいです。

第六話 告白をしよひ

放課後になると、文芸部室へ向かうことが当然のようになつて久しい。

先週は掃除当番だったこともあり、実代がいつも先に部室に来ていたのだが、今週は逆に実代が掃除当番で、僕が先に来るようになつた。

一人の時間を持て余すことなど、僕たちにはない。そもそも、本を読むためにこの場所に来たのだから、当然だ。

本来ならば、コーヒーを淹れて、ゆっくりと本の世界へと旅立つところなのだが、先日、実代にスカートめくりなる悪戯を仕掛けたところ、思つた以上に可愛かつたので、また悪戯がしたくなつてしまつたのだ。

鞄を本棚の影に仕舞い込み、自分は備え付けの掃除用具入れに身を潜める。実代が部室にやつてきて、落ち着いて本を読んでいるところを、後ろから驚かすという、幼稚かつ極めて楽しそうな悪戯である。

田線の高さに丁度、部室を確認できる通気口があるので、そこから様子を窺つこと十分。実代ががらりと扉を開けて、部室に入ってきた。

「……まだ来ていないか」

部室をぐるりと見渡して、実代はやれやれと鞄から文庫本を取りだした。しかし、すぐにそれを開くことはなく、ラジカセのスイッチを入れて、コーヒーのドリッパーの前に立つた。

「ふむ。思いきり苦くするか。誠一のしかめつ面も面白そうだ」

聞き捨てならない独り言を呴きながら、実代はコーヒーを用意はじめめる。ちょっと予定とは違つが、このタイミングで驚かせてやうかと思った。そのときだつた。

「失礼するぞ」

部室のドアをノックする音と共に、低い男の声が聞こえた。実代が振り返ると、がらがらとドアが開く音がして、男子が、部室に入ってきた。

あまり良好とは言えない視界だが、友人、知人ではない男だということはわかつた。ただ、見知らぬ男子でもない。顔ぐらいは見たことがあった。

「確かに、生徒会長ドノ、だつたかな？」

実代が問いかける。そう、彼をどこで見ていたかといふと、全校集会などの場の、壇上や、部長会議や部費交渉での場面においてだつた。

イケメンという言葉はあまり似合わないが、容姿は男の僕から見ても整つていて、それで何故、イケメンが相応しくないかといふと、顔立ちがとても上品だからだろ。少し神経質そうではあるが、嫌味がなく、すつきりとした印象を受ける。銀縁眼鏡が地味な印象ではなく、理知的なイメージを産むほどだ。だから、俗な言葉よりも容姿端麗とか、端正な顔立ちという言葉が似合つ男だつた。

「ああ。生徒会長を務めている、不破」という

生徒会長 不破はぐるりと部室を見渡して、ふむふむと頷いた。

「中々趣味が良い部室だ」

「ふむ。入部希望か？」

不破の言葉に、実代がはぐらかすような質問で返した。

「それも悪くはないが、これでも忙しい身でね。落ち着いて読書といふわけにはいかない」

「損な人生だ」

実代は不破の言を予期していたのだろう。苦笑してコーヒーを力

ツブに一つ注いだ。

「その忙しい会長ドノが、何用かな？」

不破に席を勧め、実代もソファに身を沈めた。不破はゆっくりと腰を降ろすと、コーヒーを一口啜つた。少し顔が歪む。

「まあ、査察というところだ。部活動は生徒会が面倒を見ている、

とこう形になつていないのでね。一二三、質問して良いだらうか？

「生憎、部長はまだ来ていません。筋から言えば、その手の話は部長に持つていいく物だらう？」

一人の問答は、およそ高校生らしい雰囲気がまるでない。淡々としており、落ち着きがある上に貫禄まで備わっているのだから、芝居の一幕のようですらある。

「部員数が一人の文芸部だ。誰が答えるも大差あるまい。それに、雪吹さんは副部長だったと思うが。部長の代理という形で頼めないか？」

「まあ、そちらがそれでいいのなら、答へよう。しかし、わざわざ私の名前まで調べたのか？」

実代がやれやれと肩を竦めて、不破を見る。確かに、わざわざ各部活動の部長、副部長の名前を覚えるのは、それなりに苦労するだろ？

「そこまで熱心な生徒会長でもないさ。君のことは、前々から知っていた。それより、質問だ。かねてから、まともに活動している記録がないのだが、これはどうこうことだらうか？」

「ふむ。まあ、この性格だ。生徒会には要注意人物とでも映つたか。活動に関しては、部員数が少なく、先代からの引き継ぎも一切無い状態だった。旺盛な活動ができるはずもない。しかし、最近ようやく取り組むモノができた。結果をお見せできるよう努力している」

「生徒会ではなく、僕個人の興味として君に関心がある。なるほど、吉野先生が申請したという感想文だな。ならば、それに関してはこれ以上問うまい。部活動に関してだが、何か申請はあるだらうか。予算に関しての陳情は別途の機会にしてほしいが、改善して欲しい点などあれば、聞くが」

「わざわざ関心を持たれるほどの人間ではないが。部活動に関しては、特に問題はない。不満なく、専念できている。ただ、一つ願うことがあるのであれば、今回の吉野先生が申請した感想文だが、いきなり結果が出るほど、甘くもあるまい。結果よりも、活発に活動

している点を重視してほしいところだ」

まるで政府首脳の会談のような、腹の探り合いという会話であるが、それと同時に口説き文句のような歯の浮いた台詞を並べる不破には恐れ入る。それに平然と応対する実代も実代であるが。

「実に魅力的な女性だと思うけどね。結果が大事には違いないが、過程は過程で重要だと僕も思う。参考にさせていただこう」

「理解してくれる男性は、私も嫌いではないな。しかし、会長ドノよりも、気の合う恋人がいる身だ。さて、質問はこんなところだろうか？」

実代の言葉に、僕は少し嬉しくなった。あまりにも自然に、彼女は僕を選んだのだから。

しかし、その反面。現状の自分を省みて、心底情けなくも思った。何故、僕はロツカーの中で出刃亀のように覗き見をしているのだろうか。

「ふむ。ここにきて、話が一つにまとまつたか。最後に一つ。恋人とは鷹成誠」……文芸部の部長で間違いないか？」

自分の名前が不破の口から飛び出してきて、僕は少し焦った。

「それが最後の質問か。答える義理はないな」

「……確認しただけさ。要は、この部室が健全な目的で使用されているかを聞いたかっただけだ。一人きりの部活動で、ここは密室だ。男女交際を否定するつもりはないし、部内での恋愛も個人的には構わないが、風紀の問題もある」

「愚問、というやつだろう。聞かれて困ることなどしていない。健全で清らかな交際をしているよ」

実代の堂々とした大嘘に、我が恋人ながら恐れ入る。つい先日、ちょうど不破が座っているソファでセックスをしたばかりである。「ならば、問題はない。そうそう、雪吹さん。質問は終わりだけど、最後に一つ、頼みたいことがあるんだ」

不破はにこりと笑って、実代をまっすぐと見据える。実代は表情を変えることなく、じっと不破を見ていた。

「僕と、交際していただけないだろ？」「

第七話 恋を知る

せつなる恋の心は尊きこと神のごとし

樋口一葉

不破。確かに名前は俊彦（としひこ）だつたろうか。

我が校の生徒会長であり、同学年。同じクラスになつたことがないし、面識もないのに彼を詳しくは知らないが、いかにも生徒会長らしい生徒会長、というのが僕の感想だつた。

銀縁眼鏡が似合う、端正な顔立ちは、女生徒からも人気が高いだろう。やや神経質そうでもあるが、物腰は至つて穏やかで、礼儀正しい。本人が壇上で語つていたことだが、中学生の頃から生徒会長をやつていたらしい。一年生の頃に、先輩を相手取つて選挙に勝ち、今年度も間違なく彼が会長を務めると言われている。

「先ほどのやりとりの後だが、敢えて聞こう。私には既に恋人がいるのを知つての告白か？」

僕が突然の出来事に呆然としているうちに、実代はいつもと変わらぬ様子だつた。それは不破も同じで、愛の告白らしからぬ、抑揚のない声で後に続ける。

「勿論也。浮気相手になるつもりもない。鷹成君と別れて、僕と交際してほしい」

再び自分の名前が拳がつて、ようやく事態を把握する。実代と僕が別れる。そして、実代と不破が交際する。

「残念だが、お断りしよう。誠一と別れるつもりはない」

僕がどうこう思う前に、実代は答えを出していた。僕は少し安心した。この環境は気に入っているのだ。未だに好きだとか、惚れた腫れたを理解できない僕たちだが、お互いを気に入つていて、今が

心地よいと感じているのは事実の筈だ。実代の本音を知ることはできないが、きっと同じように感じてくれているのだろう。

「あつさりとフられてしまったか。なるほど、かなりショックだよ」不破は言葉とは裏腹に微笑みながら、コーヒーを啜つた。やはり、相当苦かつたのだろう。顔をもつ一度しかめて、大きく溜息をついた。

不破はそれからしばらくして、不意に立ち上ると「失礼するよと、割と爽やかな表情で部室を後にした。

「……やれやれ」

実代は断りの言葉を口にして以来、久しぶりに咳いたかと思つと、ぽふ、とソファに身体を大きく倒した。

まいつたことに、完全に出ていくタイミングではなくなつてしまつた現状に、どうしたものかと思い悩む。今、いきなりロッカーから僕が出て行つたらどうなるだろうか。普段なら実代は呆れた顔の一つで済ませるだろうが、正直なところ、この状況の実代は想像ができない。

僕がどうしたものかと狭いロッカーで首を捻つていると、実代が不意に立ち上がり、そのままスタスターと部室から出て行つてしまつた。そして、がちゃりという施錠の音が聞こえる。

「……はあ」

僕が来ないので、先に帰つたのだろう。とりあえずしばらく待つてから僕はロッカーから抜け出した。

「……何やつてんだる」

無性に情けなくて、気を紛らわせるように一人ごちる。しかし、我ながら妙なタイミングで悪戯を試みたものだ。心から、スカートめぐりをしなくてよかつたと思う。もしも、今日にスカートをめぐつていて、あの不破に見つかっていたら、即刻廃部だつただろう。それにしても、その不破という生徒会長。一体どういうつもりなのだろうか。およそ告白らしからぬ雰囲気での、真っ向からの告白。

「失礼する」

「うわあつー？」

不意に先ほどと同じ声が聞こえ、がらりと扉が開いた。びっくりして振り返ると、何故か、去ったはずの不破が、真っ直ぐと僕を見据えていた。

「え、えと……どうして？」

査察が目的なのか、それとも告白が目的なのか。そんなことは知らないが、用事は終わつたはずだつた。なのに、何故またここに来るのであらうか。

「なに、僕の位置から、ちょうどロッカーの通気口から覗く人影が見えていたものでね。文芸部で、雪吹さんがあの場にいて、そんなことをするには、鷹成君だけだらうと踏んだまさ」

不破は爽やかとも、冷徹とも取れる笑みを浮かべて、肩を竦めた。そういうポーズがひどく似合つるのは、彼の長所なのか短所なのか。

「まあ、雪吹さんとの会話を聞いていただらう。僕の気持ちは知つて貰えたと思う。その上で、少し話があるんだ」

盗み見ていたことを怒つているような節はない。むしろ、不破の口ぶりからすると、敢えて僕に告白のシーンを見せたかのようすらある。どういう、ことだらうか。

「……コーヒーを淹れるよ。今度は、そこまで苦くないものをね」「僕がそれだけ言つと、不破は満足そうににこりと笑つた。

「恋愛においては、恋したふりをする人のほうが本当に恋している人よりもずっとうまく成功する。これはフランスの高級娼婦として有名な、二ノン・ド・ランクロという女性の言なのだけれどね」

向かい合つてソファに座つた途端、不破はまるで先手を取るかのように、ぼそりと呟いた。そして、それは実に効果的だつたと言える。

恋したふり。その言葉が、ぐさりと僕の胸に突き刺さつた。これだけ遠回しな单刀直入もはじめてである。不破は、一体どういう経

緯なのか、僕と実代の関係がどのようなものであるのか、気付いているらしい。

「吉野先生から聞いたよ。恋愛小説の感想文を投稿するそうじゃないか。そして、それを堺に、君と雪吹さんは交際を開始した。前々から雪吹さんに関心を持っていたのだが、およそ彼女は、恋愛に興味を持つ人間には思えなかつた。だからこそ、僕も行動に移せなかつたのだが……そうなると、実に不思議だ。僕の見立てが間違つていたのならば、問題はない。声をかける勇気が持てなかつた僕が、悪い。しかし、こう考えるとどうだらう。もしかして、雪吹さんは、件の感想文を書くために、恋愛を経験しようとしているならば、と」不破の推理が当たつていることは、先ほどの言葉からもよくわかつていた。しかし、改めて道筋立てて聞いてみると、鮮やかすぎる。自分たちの学校の生徒会長が頭の良い人間で、勘も鋭いことは有り難い話であるが、この状況では喜べない。

「僕は、これほど自分が生徒会長であることを感謝したことはなかつた。生徒会長でなければ、吉野先生から感想文の話を聞くこともなかつただらうからね」

黙り込む僕を尻目に、不破は朗々と語る。湯気の立つたコーヒーは、お互い口をつけることなく放置されていた。

「……僕たちを、笑うのかな？」

僕は、ようやく一言だけを呴くことができた。

これは直感であつて、他の何物でもないけれど。多分、不破は本当に実代のことが好きなのだと思う。

恋を知る男は、一体どんな風に僕たちを見るのだろうか。自分の好きな人を、その人のことを好きではない男が奪つたのだ。悔しいのかもしれない。悲しいのかもしれない。僕は、そんなことすらわからない。

ただ、このあまりにも巫山戯た、まま」とのよだな恋愛を見て、滑稽だと思わない人間がいるだらうか。当人である僕ですら思うのだ。この関係が、いかに滑稽で、馬鹿馬鹿しいのかと。

「笑えるほど、達観しからやいないわ。正直なところ、實に悔しい。君が彼女を好きならば、或いは許せたのかもしれないけどね。どうやら、君も雪吹さんと同じのよつだ。恋愛を、知らないのだよ。」

「……ああ、そうだよ」

仮に、僕がここで否定したら、不破は僕を許しただらうか。妙に素直なのは、僕の美德であると同時に、やはり悪癖だ。

不破は僕の様子をじっと窺っていた。まるで、僕の仕草から、本質を捉えようとするかのように。実代と似ているが、少し違う。彼女に見つめられているときは、心地よかつたが、今は妙に落ち着かない。

「別れてくれ

そして、その言葉は唐突に飛び出した。

「君たちの関係は、君たちが決めたことだ。本来ならば、僕が口出しして良いものではないと思う。けれど、僕には許せない。雪吹さんが、好きでもない男と並んで歩くこと。その男が、雪吹さんを好いていないこと。君には、わからないだろ。この辛さは」

冷静だったはずの不破の言葉に、微かに感情の色が見え始めた。表情はあくまでも変えずに、ただ、淡々と言葉を並べているだけのはずなのに。不破の言葉に熱が混じっていることがわかった。

ああ、成る程。これが、恋なのだろう。誰かを想うことと、自分が口出ししてはいけないことにまで、口を出してしまうこと。あくまでも、恋という感情の一端でしかないのだろうが、少なくとも、この不破の行動は恋によるものなのだ。

「できるなら、奪いたい。僕が、雪吹さんの隣に立つ男でありたいと思う。けれど、雪吹さんはそれを望んでいない。彼女を本気で好きな僕より、ままごとの相手である、君を選んだ。けれど、それで諦められるならば、君たちを許していただろう

怒り。嫉妬。悔しさ。

きっと、それは負の感情なんかじゃない。思わずそんなふうに考えてしまつほど、不破の言葉は真つ直ぐだつた。

雪吹実代という女性を、不破俊彦という男は、真剣に想っている。だから、真剣でない僕たちを許すことができない。どうして自分では届かないのかという嫉妬すら、真っ直ぐな想いを象徴しているかのようだ、強さがあった。

未だ崩さぬ表情の裏に、不破は一体、幾ばくの想いを抱えているのだろうか。恋を知らない僕には、それを理解する術を持たない。「……別れてくれないか。僕の勝手な気持ちには違いないが、僕は君たちを認めない。僕が君以上の人間だなんて言わない。彼女を今までに幸せにできる保証など何もない。けど、僕は彼女の不幸にしてでも、この状況を許すことができない」

それだけ言って、不破は大きく息を吐いて、コーヒーに口をつけた。まるで、それが言いたいことを全部言つた証であるかのように、僕は思った。

僕は、一体どうするべきなのだろうか。
恋を知らない僕ですら、わかってしまうほどに、不破は真剣に実代を想つている。

僕と実代の関係を見抜くほどに、頭の良い人間が、あまりにも愚直に僕に別れを求める。それは、きっと恋をしているからだ。彼ら、もっと計画的に僕たちを別れさせることもできただろう。それだけの行動力がある人間だと思う。

しかし、不破はそうしなかった。あくまでも、真っ直ぐに実代に想いを伝えた。あまりにも下手くそな伝え方だったが、それも、想いの強さ故なのだ。冷静な表情を変えなかつたのは、強さ故の弱さだ。

普段の彼ならば、情に訴えかけることもできただろう。もっと、ムードを作ることもできただろう。しかし、好きな人を前にして、それができなくなつた。

ただ、表情を変えずに。ムードとは無縁の、淡々とした調子でしか愛を語れなかつた。幾万の歯の浮く台詞よりも、真っ直ぐで、強

い想いだつたのだ。

気付きたくなかった。否、正確に言えば、こんな形で気付きたくはなかつた。

恋愛の強さと弱さ。不破の想いが、僕にそれを教えてしまつた。そして、同時に理解させてしまつたのだ。

僕がどう足搔いたところで、不破ほどに実代を想うことなどできない。いくらキスを交わし、身体を重ね、手を繋いだところで、知ることなど出来ないものだつたのだ。

これが、恋愛だ。僕たちが求めて、愚行を繰り返した先には決してなかつた、恋愛感情というものだ。

「ひとつ、教えてもらつて良いかな？」

僕の言葉に、はじめて不破の表情が変わつた。少し、驚いていたようにも見えたが、僕にはその表情がどのような感情の表れなのかわからなかつた。

「何故、実代を好きになつたんだ？」

我ながら、馬鹿げた質問だと思う。ただ、知りたかつた。

何故、不破はそれほどまでに実代を想えるのか。その理由は何なのだろうかと。

もし、僕がそれを知ることができれば、或いは、僕も実代を「ジエローム・K・ジエローム」というイギリスの作家を知つてゐるかい。彼はこう言つた。恋ははしかと同じで、誰でも一度はかかる、とね。はしかに罹る理由を、僕は知らない

思考を遮る不破の言葉に、僕は頃垂れた。

ジエローム。『ボートの三人男』という旅行小説の筆者だ。カート・ヴォネガット同様、ユーモアのセンスに富んだ作家で、僕も幾度となく彼の著書を読んでいる。好きな作家の一人だつた。

「肺炎よりも、はしか、か」

僕の呟きは、おそらく不破にはわかるまい。だが、それでいい。僕は一度顔を上げてから、もう一度下を向いた。

頃垂れではなく、首肯という形で。

第八話 別れ話をしよう

吹雪実代という女性と交際して、三週間。

その期間が長かったのか、短かったのかはわからない。ただ、そのひとときが僕にとって有意義だったことに変わりはない。できることがならば、もつと彼女とまことに続けていたかった。だけだ。

「誠」……もう、喧嘩は経験した。意趣返しならば、受けて立つが？」

僕の「別れよう」という言葉に、実代はいつものように不敵な笑みで返した。

相変わらずの文芸部室。昨日のよう口ロッカーに隠れたりせず、ちゃんとソファに座つて実代を待つた。きちんと、別れるために。実代は少し考えた様子の後に、ふと顔を上げた。

「……確かに、別れ話というのは未だに体験していなかつた。ある意味、これも恋人らしいことなのかもしれないな」

なるほど、僕の言葉を「恋愛らしいこと」の一環と捉えたらしい。実代は幾度も頷いて、「それは考え方なかつた」と呟いた。

「流石に喧嘩で出でなくしたと思っていたが、まだあつたのだな。しかし、いいのか。これをすると、その、終わつてしまつただが？」

実代はやや腑に落ちない様子で、僕を見ていた。当然だろう。僕たちはまだ、恋がどんな感情であるのかなど、全然理解できてないのだ。今、終わつてしまえば、感想文を書くことはできない。「終わらせようつて、言つてるんだ」

それでも、その言葉が口からすんなりと出たのは、昨晩から自らを洗脳するかのように、何度も練習したからだらつ。

「……なるほど、恋愛を知るための一環ではなく、誠一がそう決めたということか」

実代はやはり、とても頭が良い。僕の少ない言葉で、すぐに理解

してくれた。そして、彼のことだ。理由も聞かずに、頷いてくれるのだろう。

僕たちはずっとそうだった。お互いのプライベートに深く関わることはせず、ただずっと、本という世界だけで繋がっていた。だからこそ、穏やかな時間を共有することもできたのだし、その関係を快く思っている。

ただ、それだけの繋がりで、恋人と名乗るのは鳥游がましいことだった。恋がどんなものかなんてわからないけど、恋をしている人間の気持ちに触れてしまった。あの真っ直ぐな想いの前で、僕は実代と手を繋ぐ勇気が持てなかつた。

「他に、好きな人でもできたのか。それならば、是非その気持ちを感想文に活かしてもらいたいが」

実代が再びにやりと笑んで、僕を見た。少しだけ、呆気にとられる。

そんなことを聞かれるなどと、夢にも思つていなかつた。

「違うよ。別に、そういうわけじゃない。僕は、相変わらずさ」

辛うじてそう咳いて、微かに覚えた違和感をじっくりと見つめ直した。

何かが、少しだけ違う。そう、非常に小さな違和感だけど、それをはつきりと感じることができる。

「……つまり、それは文芸部を廃部にするということか？」

実代は少しだけ眉をひそめて、僕を真っ直ぐと見据えた。微かに怒気を孕んだ瞳に、僕は少しだけ安心した。

「そのつもりはないよ。存続はさせるさ」

僕の言葉に実代は満足そうに頷いた。確かに不破の気持ちに対し、僕たちの関係があまりにも許せないものだが、それと同じくらい、僕たちも文芸部が無くなることは許せない。

僕だって色々と考えた。不破が生徒会長だから、いつそ交換条件で文芸部を存続させてもらつよう頼んでみようかとも思った。だけど、それは実代を生け贋に捧げるようなものだ。不破もいい顔

をしないだろ？

ならば、どうするか。恋愛感情とは違うが、実代との交際で得たものはあった。心地よい時間と、ただ、幸せだとしか表現できない安寧。課題の主題からは外れるが、自らの感情と、作品の主人公の感情の比較などを書くのが良いだろ？ これならば、単なる「感動した」という旨を記した、茶を濁すような類の感想文にはならないし、オリジナリティだけならば抜群だ。

「……嫌だと、言えばどうする？」

僕が少し考えている間に、実代は元の笑みに戻り、ゆっくりと問い合わせた。

まだ。また、違和感を覚えた。さつきよりも、強く。

今度はどこがおかしいのか、はつきりとわかつた気がする。今まででは、絶対になかったことが、起きているのだ。

何故、実代はこんなに食いついてくるのだろうか。

僕たちは決して同じ人間ではない。そりやそうだろ？ 鷹成誠二と、雪吹実代。名前からして違う。生まれた年は一緒だけど、血型も誕生日も違う。ましてや、性別すら違うのだ。同じであるはずがない。

しかし、それでも僕と実代は同じだった。つまり、性格や考え方、趣味などが。

お互いの考えていることが大体わかつたし、予想外の行動に相手が出たとしても、結局は「実代らしいね」「誠二ならば、それもありか」という感想に至る範疇だった。実代が交際を提案してきたときでさえ、僕はさして焦りはしなかった。

知り合って一年間。最初の半年はお互いをほとんど知らなかつたとはいえ、沈黙の中でさえ、お互いに同類だと感じていたほどなのだ。少なくとも、違和感という言葉は、僕と実代のストーリーには存在しなかつた。

それが、ここにきて不意に頭をもたげた。一体、何故だろ？

何故、実代は黙つて頷かないのだろうか。今までの彼女ならば、そうしてくれたはずだ。立場が逆ならば、僕だってそうした。それでこそ、僕たちらしい関係だつたはずなのに。

何故、実代は、僕の言葉に頷かないのだろうか。

「私は、誠一と交際していく楽しい。恋愛感情を知るために、ことを、忘れるほどにな。無論、文芸部を存続させたいとは思うし、そのためのことだというのも重々承知しているが、何でもない日が楽しみだと思える幸せを、私は知らなかつた。終わらせるには、あまりにも惜しい」

僕が深く考え込んでいると、実代はふつと頬を緩めて、穏やかに語り始めた。

「私どりのことが苦痛ならば、引き留めはしない。正直などいふ、その線は無い」というのが見解だが

「うん。苦痛どころか、僕も楽しいと思つてい

「だろうな。ならばこそ、わからない」

実代は苦笑して、コーヒーを啜る。そして、ゆっくりと田を開じて、大きく息を吐いた。

その仕草が、やりきれない様子というよりも、面倒臭いといった様子であることがわかるあたり、僕はもう実代マニアと呼べる状態なのかも知れない。

否、今はまだ恋人だ。恋人だから、とことことしておこう。次に続く言葉が僕を脅かすことすら理解できてしまつのは、僕たちが仲睦まじい恋人だからだ。

そう、信じたかった。

「あの、不破という生徒会長の差し金か

実代が「あまり考えたくはなかつたが」という顔で言つた。

「決めたのは、僕の意志だけね」

僕はすかさず、用意していた言葉を返す。実代のことだから、不破の存在が僕に別れ話をさせていくことぐらい、見抜くと踏んでい

たのだ。もしかしたら、先日ロッカーに潜んでいたことすら、実代なら気付きかねない。

「不破と付き合えなんて言わないけどね。少なくとも、彼の気持ちは本物だった。真剣に実代を好いている人がいて、僕はその前で実代と手を繋ぐことは、できないよ」

「……誠」「らしいよ。まつたくもって」

実代は肩を竦めて見せると、すくと立ち上がった。真っ直ぐに僕を見据えて、つかつかと田の前にやってくる。

「立つてくれないか?」

「え……あ、ああ」

一発殴られる覚悟はしてきた。流石の実代ももう少し怒るだろうと思っていたので、少々拍子抜けしただけだ。

僕が立ち上ると、まず一発。ペシッと軽く、頬を叩かれた。ちつとも痛くない。

「実代?」

「これが答えた、馬鹿」

馬鹿はひどいだろうと、抗議しようと思つたときには、僕の唇は実代にふさがっていた。

肩をぐつと握られて、そのままソファに押し倒される。思いがけない強い力に、抗うことすら忘れて、僕たちは今まで一番長いキスを交わした。

「真剣な不破よりも、ほんやりとした誠一の気持ちのほうが、私にとって嬉しい。そんな簡単なことすら、誠一はわかっていない」「けど、不破は本気なんだ。多分、実代が思つてはいるよりずっと、

ずっと真剣で」

「ならば、世の中のストーカーと呼ばれる人間は、歪んだ形であれど、これ以上ないほどに真剣だろうに。真剣か否かで恋愛をする資格が問われるならば、そもそも私たちは交際してはいけなかつた。そうだろう?」

返す言葉がなかつた。ぽかんと開いた口が、再び実代に塞がれる。

どうしてだろうか。別れを決意したはずなのに、実代とキスをしていると、それが段々と馬鹿げたことのように思えてくる。確かに不破の気持ちには申し訳ないが、それでもなお、僕は実代のキスを拒む気が失せていった。

「……恋とは、素晴らしいと聞いたが、ちつともそつじゃない。こんなに面倒なものだつたとはな」

どこかやりきれない表情の実代がぼそりと呟くのを聞いて、僕はようやく、実代をぎゅっと抱きしめた。そして、その温もりと存在感を感じたときに、不意に目から涙がこぼれた。

「……ほんと、厄介なものだね」

僕たちは恋を知らない。

けど、もしもその前提が間違っていたのならば。

ずっと前から、僕たちはお互いに恋をしていて、それに気付いていないだけなのだったら。

そうだったら、それこそ三流小説だと自嘲しながら、僕はずつと実代を抱きしめ続けた。

第八話 別れ話をしよう（後書き）

少し更新が遅れ、申し訳ありませんでした。

第九話 友達になろう

「それが答え、か」

相変わらずの文芸部室。据えた本と、コーヒーの香りが漂い、チップなジャズが流れる、僕にとつてはこの上なく落ち着くことの出来る場所だ。

本来ならば、この場にいるのは部長たる僕と、副部長にして恋人の実代の二人の筈なのだが、今日は少々面子が違う。

眼前でコーヒーを啜るのは、生徒会長であり、実代に恋をしている男。銀縁眼鏡が妙に似合つ、落ち着いた風貌の不破だつた。

「ああ。一度は承諾しておいて、しかもたつた一日で反故にするのも悪いけどね」

僕がそう言つと、不破は苦笑して手をひらひらと振つた。

「いやいや。そんなものだらう。失つて初めて気付くのが、大事なモノさ。失う前に気付けた君は、僥倖だ」

あまりに穏やかに不破は、僕の反故を許した。わけがわからずに戦々える僕を、不破はおかしそうに笑う。

「君たちは、生半可な気持ちで交際に至つた。これは事実だと思つがね。結果、お互いを失いたくないと思うようになつた。否、なつていたというほうがいいか。どちらにしろ、雪吹実代という女性は鷹成誠一のものだと、言えるようになつた。そこに戯れの気持ちがあるとは思えない。きっかけがあることか自分自身だとも思いたくはないが、まあ、雪吹さんの幸せを願う身としては、万々歳さ」

「万々歳なはずないだらう。不幸にしても、奪いたいと言つていいだらう?」

「不幸を願つわけではないさ。幸せなのが一番に決まつていて。悔しいとも思うし、今からでも、と思わないでもないが、男が交わした約束を、舌の根が乾かぬうちに違えるのは、君の本意ではなかつたはずだ。だが、それをしていうことは、それだけ君たちが、君

たちの思つてはいる以上に強い絆で結ばれていたと言つことだらう。

正直、道化を演じた気分……否、まさしく道化だな」

そう言つて笑う不破の笑顔は、やはり本物だつた。それだけに辛い。

「僕からこういふのもおかしいけど、不破のおかげだと思つ。まだ恋愛がどんなもののかつて、はつきりとはわかつてないけど、少なくとも、僕と実代は本当の恋人になれた気がするんだ」

礼にもならない。さらに苦しめるだけの言葉なかもしれない。けれど、これははじめだと思つた。本音で語つた不破に対し、僕が本音を語らないというのはおかしい気がした。ありがとうとは流石に言えないが、せめて、目の前の男が単なる道化ではなかつたことを伝えたかった。

「君たちは、恋人だよ。僕はそれを認めて、許せる」
それだけ言つと、不破は満足そうに頷いて、コーヒーを啜つた。
苦い顔をしたのは、コーヒーの所為だけではなかつたのだろうと、思つ。

結局、僕と実代に目立つた変化などはない。

実代が恋とは面倒なものだと言い放つたものだから、てつきり恋愛感情を知ることができたのかと思つたが、その辺りは本人にもよくわかつておらず、彼女の言葉を借りるならば、こうらしい。

「別れを切り出された瞬間、強く嫌だと感じた。離れたくない、とな。別に恋人同士でなくとも、部室に来れば嫌が応でも顔を合わせるというのに、あのときは離れてしまうと真剣に危惧した。これが恋なのならば、本当に面倒臭いものだ」

僕が考へるに、どうやら恋愛感情とは、ひとつものではないようだ。

実代が感じたのは、失うことへの焦りや、悲しさだ。それが恋愛感情だと定義するにはあまりに単純すぎる。

しかし、それが恋愛感情が生み出したものならば。或いは、恋愛

感情の一つであつたならば、僕たちは、答えに近づいていふことになる。

「帰りに本屋に寄りたいのだけど、付き合つて貰えないだろ？」「昼休みに、クラスメイトと弁当を食べていると、突然不破が僕の所にやつてきた。

実代と別れ話をして、すぐに仲直りしたのが三日前。不破とそのことについて話したのが一昨日になるから、当然ながら僕は謝りんだ。

腹いせに文芸部を潰そうとするような男でないことはわかつている。しかし、だとすれば不破の行動はどういう理由から来るものなのだろうか。

「部活があるんだけど」

僕がとりあえずそう答えると、不破は実代ばかりの不敵な笑みを見せて、眼鏡を人差し指で整えた。

「サボつて咎められる部活でもあるまい。なに、雪吹さんには既に了承済みさ」

嫌に用意周到な誘いである。たかが本屋に寄るためだけにそこまで手回しをするとなると、ますますもつて怪しい。

「おつと、勘違ひしてくれるな。僕は別に、雪吹さんと君を引き裂くこととするつもりは毛ぼどもないんだ。そんなことをしては、僕が雪吹さんに嫌われるだけさ。よもや、好きこのんで想い人に嫌われる真似はするまい」

「やつぱり、まだ好きなんだ？」

「そう簡単に消える想いなら、あのよつたな行動には出ないさ」

不破はやけに明るく笑い、あまつさえ僕の肩に手を置いた。その親しげな態度がいつそう僕を怪訝な表情にさせるのだが、不破は知つてか知らずか、お構いなしに話しかけてくる。

「折角の縁なんだ。こうなつた以上、お互の禍根を流して、友達にならうというのが僕の考えだ。雪吹さんさえいなければ、僕たち

はきっと、とてもいい友達になれると思ったものでね。ならば、僕たちの間に雪吹さんという存在を挟まずとも成立する絆を作つてしまえばいい。さしあたつて、お互いに読書を趣味としているようだし、本屋という線は悪くないと思ったのだが」「ここまでダイレクトに「友達になろう」と誘われたのははじめてである。

確かに、不破は気性や性格をみれば、友達として過不足なくやつていけそうである。基本的にこのような手合いと仲良くなれるのは、実代で証明済みだ。

「まあ、いいけどさ。ただ、友達ってさ、なるうとしてなるものじやないとと思うんだけど」

「恋人も然りや」

そう言われてしまつと、身も蓋もなかつた。

実代にメールで確認したところ、不破がわざわざ実代に了解を得たのは本当らしい。放課後の予定を半ば強引に奪われてしまつた僕は、不破と帰ることになった。

「しかし、快諾してくれるとは思わなかつたよ。雪吹さんと一緒にいることを優先すると思つていたからね」

「毎日一緒に、たまにはいいよ。それに、強引な手段を使つてまでお膳立てされたんじゃ、断るのも気が引けるしね」

別に実代と毎日いることが苦痛とはちつとも思はないが、実代と毎日一緒にいると気が済まないというわけでもない。

「まあ、強引だったことは認めるよ。ただ、折角気の合いそうな男がいるのに、単なる恋敵で終わるのも勿体ない。君にとつては、少々会いたくない人間かもしれないが」

プラス思考とでも言うのだろうか。きっと不破は、敵を作りながらではなく、味方を増やしながら生徒会長になり、精力的に活動してきたのだろう。

「会いたくないわけじゃないさ。どうこう顔で会えぱいいのかとは

「ううん、思ってないよ。

「ならば、今までのこととはお互の意志のもとの行動ということだけで、全てを水に流すところのはどうだらうか。僕は君と雪吹さんの関係を妬んだりしない。君は、僕に遠慮や気遣いをしない。先にも言つたが、そういう面倒なことを全てひっちやつてしまえば、きっと僕たちは仲良くなれる」

不破がそれでいいのならば、敢えて僕からは何も言つまい。

本屋に到着するなり、不破と僕はお互いの好きな作家を並べあい、その微妙なズレと合致を楽しんだ。

外國の作家の台詞を活用してはいたが、さうでもないんだね」

「当然が何よりも大事なのは、文章に対する想い。文章を書く人間が、文章を読む人間が、文章を共有している人間が書いた文章を嫌う道理はない」

「でも、ライドノヘルまで好きたとは思っていなかつたよ。そっちはあまりわからないんだけど」
僕は

「年相応の読み物だとは思うがね。得てして、文章や構成、ストーリーに難があると思われがちだが、冒険活劇などになると、多少なりシンプルなほうが映えることもある。すべての本がそうだとも思わないが、それはライトノベルに限つたことでもないだろう？」

「この作者はとても良いよ。外連味に溢れているのに、嫌らしさがそのままに僕は三冊ほどライトノベルを購入することになった。

「ふむ。 なにが、 一冊読んでみようか。 書が持つてこない作品はない。 むしろ、 それが何よりの味になつてゐる」

るか?』

不破は僕が指さした本をすぐに手に取り、懐に抱えた。

「一氣に入ったら、君の持っている本も借りてみよう。勿論、僕がこの本を読破すれば、君に貸すよ。」

「いい案だね！」

実代とも繰り返したことだが、不破と実代と僕は、みんな少しすつ趣味が違う。友達が増えて、まさか読める本の種類まで増えるとは思っていなかつた。特に、不破の好むライトノベルは図書館にも置いていないので、試してみようにも手が出にくかつたのだ。

僕たちはそれからしばらく本屋をうろつき、いざレジに並ぼうとしたところで、平積みになつてゐる一冊の文庫本に目がとまつた。

『恋』

表紙にはいい加減な水彩画でぼんやりと、一人の男女が手を繋いでいる様子が描かれている。たつた一文字のタイトルは、隅の方にちょこんと表記されていて、一見するとそれがタイトルなのか解らない。

それでも、僕が一目でタイトルだとわかつたのは、その表紙を幾度となく眺めたことがあるからだつた。

「これが、君と雪吹さんの縁か」

おそらく、吉野先生から聞いたのだろう。不破は神妙な面持ちで『恋』をじつと眺めていた。僕は頷いて、不破と一緒にその文庫本を眺めた。

僕と実代が付き合つことになつた理由。それがこの『恋』だ。あまりにストレートなタイトルは、この作品の本質であると同時に、一種の伏線となつてゐる。そこに描かれているのは、確かにとある高校生の恋物語であるが、その他にも、友情や、進路や、様々な悩みなど、高校生らしい複雑な感情が鮮やかな文体で綴られている。幾度、読み返しただろうか。今までで一番多く読んだ本なのかもしれない。

恋という感情を知りたかった。知らなければならぬという義務感よりも、知りたいという欲求のほうが強くなつていた。

そして、つい最近まで既に掴みかけていたことに気が付かないでいた。

全ては、この一冊の本から始まつたのだ。

「本から恋をみつけた、とても言うのだろうか

不破は少しおどけた調子で言った。

なるほどと思いながらも、その言い回しに少しだけ、齟齬を感じる。

少しだけ違う。そう、実代の様子がおかしかったときのよつな、ほんの僅かな違和感だ。僕たちは、本から恋をみつけたわけじゃない。

「本からみつける恋の文字、と言つまうが正しいかな」

ふと、背後から聞き慣れた声がかかり、僕と不破は同時に振り返つた。誰であるかなど、今更言うべくもないだろう。

微かな違和感を打ち消す、その凜とした声の響きが耳に心地良かつた。

「……言い得て妙と思つたのだが？」

不破が少しだけ肩を竦めて文庫本を手に取つた。実代は答える気がないのだろう。少し挑戦的な目で、僕を見るだけで何も言わない。僕に、答えさせたいのだろう。大丈夫だ。不破の言葉に覚えた違和感は、実代が消してくれた。その差は、たつた一つだ。

「僕と実代は、恋愛感情を本からみつけたわけじゃない。あくまで、恋という文字だけだよ。この本はきっかけに過ぎない。僕たち自身の行動や、不破という存在がなければ、未だに文字でしか認識できていなかつた」

僕の説明に、不破は納得したように頷き、実代は「我が意を得たり」とでも言いたげに頷いた。

「ついでに言えば、この表紙のタイトルがどこにあるのか探すのに手間取らないほど、熟読したというところにも掛けている。表紙通り、恋をみつけるのは、中々に難しかつた」

からからと笑う実代に、不破は苦笑した。そして、手に取つた『恋』をそのまま懷に抱えて、レジへと並ぶ。

「不破？」

「今更、僕は本から恋という文字はみつけない、否、みつけられない。既知つていても、改めて発見するというのは存外に難

しいものだからな」

不破の表情に、曇りはなかつた。むしろ、いつになくすつきりとした表情だった。

「ただし、知つてゐるつもりで、知らなかつたものを、みつけることはできるかもしれない。みつけたものが文字だとしても、君たちのように、そこから本物にたどり着けるかもしれない」

不破はそれだけ言って、会計を済ませるために僕たちに背を向けた。

僕が続いて並んだときには、手早く済ませたのだろう。不破はすたすたと歩き出していた。

「今日は楽しかつた。雪吹さん、鷹成を借りてすまなかつた。心配だつたのか、会いたくなつただけなのかは知らないが、僕はこれで失礼するよ。また明日、学校で」

最後に振り向き、それだけを言い残して不破は先に行ってしまった。僕と実代は田を見合させてから、しばらく不破の後ろ姿を見送つた。

「それで、どうして來たの。本屋に寄るつて言つたから、まさか偶然じゃないよね」

「なに。不破の言つたとおりだ。今日はほとんど会つていなかつたから、誠二の顔を見たくなつてな」

果たして、本気なのか、冗談なのか。実代のことは大抵わかるのだが、今回は判別し難い。きっと、実代もよくわかつていないのでろう。それが恋の欠片だということを、僕は知つてゐる。

「……ところで、不破も律儀だな。あの本なら、誠二も私も持つてゐるのに、わざわざ買うとは。貸してくれの一言ぐらい、あつてもいいものを。本の貸し借りはしない主義か」

実代が不思議そうに首をかしげた。なるほど、それは実代にはわからないらしい。僕はすぐにわかつた。

「不破のけじめだよ。僕と実代が持つてゐる本をわざわざ買つ」と

で、僕たちの『恋』には手を出さないって伝えたんだ。貸し借りは、別の本で約束したしね。たぶん、実代への想いにも、けじめをつけたんじゃないかな

相変わらず、不器用だと思つ。けど、それと同じくらい小粋なメッセージだとも思つ。

「なるほど、説明されるまで気付かなかつた。男の友情に言葉はいらないものなのだな」

実代の言葉に、逆に僕がひとつ気付いた。僕はもしかして、かなり鈍感なのだろうか。

不破。僕たちはもう、友達になれたみたいだよ。

心の中でそれだけ呴いて、僕は実代の手を取り、いつも通りの帰路へと向かつた。

第九話 友達になろう（後書き）

今回の話で誠一が不破に薦めた作家は、私の目標であり、誰よりも敬愛する浅田次郎氏という設定です。

日本語の真髄と、コメディの楽しさと難しさ。そして何よりも小説の素晴らしさを教えてくれた憧れの作家です。是非、読んでいただければと思います。

第十話 感想文を書こう

僕たちが交際を開始して、一ヶ月が経つた。

交際の節目であるのと同時に、一ヶ月というのは、もう一つ大きな意味を持っている。僕と実代が交際を始めるきっかけとなつた読書感想文の〆切が、間近に迫つているのだ。

僕たちは恋愛の何たるかを、結局知ることは出来なかつた。恋愛とはどのようなものだと問われても、曖昧に首を捻るのが精一杯である。それでも、知らないと即答しなくなつただけ、幾分の進歩が見られるのだが。

「兎にも角にも、書くしかあるまい」

実代の言葉に、ペンを握つてみたが、思い浮かぶことと言えば、実代との穏やかな日々ばかりである。恋愛感情を知ることで、何かしらの共感が生まれればと思ったが、僕と実代の恋愛と、『恋』の主人公たちの恋愛は、大きくかけ離れすぎている。彼らは、多くの事件や感情の狭間の中から、眞実の愛を見いだした。それに比べて、僕らはどうだらう。

大きな事件と言えば、せいぜい不破が実代に告白したことぐらいであり、確かに僕たちの気持ちは大きく揺れ動いたのだが、僅か三日でケリがついた。恋愛とは何かと考えるにはあまりにも短すぎたし、結果として不破と友達になるという、何とも盛り上がりに欠ける展開になつた。

「やはり、私たちでは三文小説にしかならないか。はじめて読んだときよりは、まあ、行動にも理解できる節はあるのだが、涙を流して感情移入できるほどではないな」

実代の冷静な感想が、僕たちと『恋』の温度差を明確にする。一
体、どう書けばいいのだろうか。

「……恋愛は、人それぞれということ、なのだろう。しかし、それでは感想にならない。誠一と付き合つてみると、こののは、我ながら

妙案だと思ったのだが、この結果ではな。すまないな。茶番に付き合わせた

「妙案だつたよ。それに、僕は茶番に付き合つたつもりはない。僕が付き合つたのは、実代だよ」

「巧く纏めたつもりかもしれないが……いや、そう言わると嬉しいのは確かだがな」

僕たちは顔を見合させて、苦笑した。
得たものは、恋人。幸せな時間。穏やかな気持ち。それに、妙な友達も。

それらは、素晴らしいものだと思う。この感想文がなければ、僕たちはずっと、ただの読書仲間だつただろうし、不破と仲良くなることもなかつた。恋愛なんて興味がないまま、ずっと生きていつたとさえ思う。

それでも、一番大事だと思つていた場所。この文芸部を存続させる鍵には、どうやら、ならなかつたらしい。

結局、僕たちは散々に悩んだ挙げ句、一般論に多少色をつけた、あまり出来が良いとは言えない感想文を書き、吉野先生に提出した。そんなものを仕上げるだけでも、僕たちは徹夜をして、ふらふらになつてようやく書き上がつたものだつた。吉野先生は田を通すことなくそれを仕舞い、僕たちを見て嬉しそうに笑つた。

「終わつた、かな」

吉野先生に提出して、文芸部に戻つて一息ついたところで、実代がぼそりと呟いた。

「終わつた?」

「自分で書いたものを悪く言つのも、主義に反するがな。あの感想文は駄目だ。平凡すぎる。賞どころか、審査員の印象にも残らないだろう」

「……まあ、ね」

賞が取れない。そうなると、おそらく文芸部は無くなるだらう。

不破と実代の会話で、結果だけを見ないでくれと言つたが、それでも結果が重視されないはずがない。よくて、同好会への格下げとうところだろうか。部室が奪われては意味がないので、そうなると僕たちが所属する意義はない。

「さて、そうなると。私たちの恋愛にも、終止符を打つといふことになるかな」

実代の言葉は、予想していたものだつた。

最初に。この奇妙な交際がスタートするときに考えていたことだ。感想文が書き終われば、僕たちの関係も終わる。感想文のための交際だつたのだから、当然の成り行きであり、言わば予定調和だ。

実代はにこりと笑い、朗々とした声で言い放つた。

「実際に楽しい一月だつたよ。恋愛を知らない私たちが、恋愛に取り組む馬鹿馬鹿しさが気に入つてたが、次第にそれが本物になつていつた。感想文には繋がらなかつたが、恋を知ることが出来た」

「うん。聞いていた恋愛 胸が切なくなる、高尚な感情つてやつとは違つたけど、本当に楽しかつた。最初は妙な展開になつたなあ、としか思わなかつたけど、いざ付き合つてみると、穏やかで、心地よくて、これが恋愛つていうものならば、素晴らしいものだつて思つた」

実代は満足げに頷いて、すつと立ち上がつた。

「できれば、感想文も大層なものを作上げ、ハッピーエンドといきたかったものだ」

僕も立ち上がり、実代に近づいた。

「仕方ないよ。色んな順序を蹴り飛ばして、いきなり恋人になつたんだ。僕たちじゃあ、やっぱり他人の恋愛には共感なんてできないさ」

それでも、僕たちだけの恋愛にならば、最大限の理解が出来る。

実代が言つたとおりだ。感想文にはならないが、恋愛の形なんて人それぞれで、あまりに滑稽な僕たちの恋愛劇も、決して間違つたものではなかつた。少なくとも、僕は実代が好きだと思つてゐる。

それが他人の持つ恋愛感情とは違つても、最早、どうでもいいことだ。

共感しなければならないという最大の懸念は、先ほど提出した感想文と一緒に、消えてしまったのだから。

「そこで、だけどさ。本當なら、これで僕たちの恋愛は終わりつてことになるんだろうけど、一つ提案があるんだ」

僕はおもむろにそう言つて、実代の目を真つ直ぐと見た。

滑稽だと思う。何が滑稽かというと、わざわざこんな儀式をしなければならない、僕たちが、だ。

「ふむ。流石は部長だな。交際するという部員の意見を取り入れながら、最後にはきちんとまとめてくれる

わかつてはぐらかしているのだろう。言つてしまえば、これは儀式ですらない。ただの寸劇だ。敢えて、僕を部長と呼んだ実代は、僕が即興で描いたストーリーをすぐに理解したのだろう。いや、同じタイミングで、同じストーリーを作り上げたのかもしれない。

「これは、部長としてじゃない。鷹成誠一として。部員ではなくて、雪吹実代という女の子に対しての提案だよ」

我ながら、あざといセリフだと思う。しかし、それでもこのわからきつたやりとりは、僕たちにとって必要なのだ。

「感想文を書くための交際は、終わつた。けれど、それとは関係なく、僕は実代と交際を続けたいと思う。提案というより、お願いかな。僕と、別れないでくれないか」

本来ならば、こんなやりとりがあるなどと、予想はしていなかつた。「これでお終いか。案外楽しかったね」とでも笑い合いながら言つて、読書仲間に戻るはずだった。

しかし、今となつては、そんなことを言えるはずがない。実代とは読書仲間としてではなく、恋人として、これから先も一緒にいたい。それが、この一ヶ月で僕に起こつた、最大の変化だろう。

実代は逡巡するかのように、腕を組んでじつと僕の目を見ていた。芸が細かいが、普段の実代はこんなとき、不敵に笑うので、わざと

らじくしか映らない。

「……奇遇だな。誠一が言わないならば、私から言ひうと思つていた。前にも言つたが、誠一との関係を失つのは、惜しい。この上なく、な」

ようやく、実代がにやりと不敵に笑つた。僕も肩の力を抜いて、つられて笑つた。

「答えを聞きたい」

「無論、イエスだ。他の選択肢など、無い」

僕たちは氣付けば、キスをしていた。

あまりにも陳腐なキスだと思つ。まるでドラマのワンシーンのように、お手軽で予定調和のようなキスだ。

けれど、それが予定調和であることが、何よりも嬉しい。

本来なら、読書仲間に戻るはずだった。そんな予定が、何時の間にやら、このまま恋人として過ごすという、正反対のものに変わつていたのだ。胸がドキドキするなんてことはない。唇の温かさも、柔らかさも、全てが今までどおり。物語のよつな、大恋愛なんて僕たちには必要ない。穏やかで、一見するとつまらなさそうな関係が、心の底から幸せなのだ。

「文芸部がなくなつても、いいと思うか?」

キスを交わした後、実代が試すように僕を見た。

「実代と一緒に、いいよ なんて言えたら、とっくに文芸部なんて辞めてるさ」

「それでこそ、誠一だ」

おそらく、文芸部は無くなる。ならば、最後までこの場所で、実代と一緒に過ごしたい。

「ひょっとすると、奇跡が起るかもしれないぞ。御都合主義で、ありきたりで、三文小説にしか出てこない、陳腐な奇蹟が」

「それでも、僕はハッピーエンドを願つた。御都合主義でいい。ありきたりでもいい。バッドエンドで芥川賞を取るより、ハッピーハンドで売れない三文小説のほうが、よほどいい

誰か、この物語を肺炎にしてやつてくれないか。
そんなことを考えながら、僕たちは心ゆくまで、この文部部室で、
ひたすらに穏やかな時間を過ごした。

第十話 感想文を書こう（後書き）

次回が最終話となります。

最終話 ハッピー・ハンド

楽しい時間といつのは、得てして過ぎ去るのが早い。

会心の出来とは口が裂けても言えない感想文を提出した僕たちは、文芸部の行く末を案じながらも、一月ばかり、穏やかな時を過ごしていた。

休みの日にはデーターに繰り出した。手を繋いで歩いて、喫茶店で休憩して。

たまにセックスもした。相変わらず実代はそういうときだけ、妙に恥じらった。

キスは、あまりしなかったかもしれない。お互いが傍にいるということだけで、心が安らいだので、それ以上を求めなかつたのかもしれない。

恋人という存在が、万人にとつて同じとは思えない。それでも、僕たちは世間一般と同じことをしながらも、明らかに違うように思つていた。

ドキドキなんてしない。切なかつたり、強く会いたいと願つたりもしない。ただ、穏やかな日常の象徴として、相手がいるだけだつた。

だが、そんな日常が続くかと言われば、そうではなかつた。諸行無常というのは仏教の言葉らしいが、なるほど、中々言い得て妙である。全てのものは、変わらずにはいられない。

「残念だけど……廃部が決定したわ」

吉野先生に呼び出されたのは、五月も終わりを迎えたとした、暖かい日のことだった。

半ば覚悟を決めていただけに、驚きは少なかつた。それでも、最高にして唯一の読書の場を奪われるのだと思うと、ショックは大きい。

「会議では色々揉めたみたいだけど、最後は不破君 生徒会長が、

潔く廃部にしてしまおうって言つたらしいわ。彼の所為ではないけどね。他の部を納得させるには、それしかなかつたんでしょう」
なるほど、不破らしい。公私を混同せずに、正しい判断を下したわけだ。不破を恨むつもりは毛頭ない。他の部の人間達もだ。彼らは実に真つ当な正論を述べたに過ぎない。

この先、どこで本を読もうかと考えながら、僕は吉野先生に一礼して、その場を去つた。

「やはり、無理だったか」

実代の反応は、淡々としたものだった。彼女も僕と同じで、覚悟をしていたのだろう。ショックは大きいだろうが、それを敢えて表情に出すつもりはないようだ。

「やれやれ。どこで、本を読めばいいのだろうな」

実代は苦笑して、部室に備え付けられてある本棚を見渡した。考えていることが、本当に全部同じに思えて、僕もつられて苦笑いで返してしまつた。

「誠一は、家は兄弟がうるさいのだったな。喫茶店に行く金も無く、図書館は落ち着かない上に遠い。世知辛いとはこのことか」

「そういえば、実代はどうして家で本を読まないの？」

実代の家には、一度行ったことがある。落ち着いて本を読めそうな部屋だという印象があつたのだが。

「確かに、姦しい兄弟はいないがな。両親の喧嘩が絶えなくて、おちおちと読書なんてできなさい」

「初耳だね」

僕の家は、基本的にとってもうるさいが、それも家族仲がいいから、うるさくできるのだ。喧嘩も時折するが、お互いに仲が良いとわかつていてるからこそできるような喧嘩だ。

「家族仲が悪いわけではないさ。喧嘩は親にとって、『ハリコニケーションの手段であつて、それ以外の何物でもない。私もそれとわかつていてるから放置しているが、如何せんうるさくて敵わない」

結局、僕たちはとことん似たもの同士なのだから。喧嘩が「ミコニケーションツールとして役立つというのは、中々興味深いが、実代が気にしていないならば、敢えて僕がそれを心配する必要もない。「そんなことよりも、これからどうなるのだろうな。よもや、文芸部が潰れたから」と言つて、私たちの関係も潰そななどとは思わないが、正直などといふ、この場所で誠一とのんびりとするのが、何よりも楽しい。思い出の場所にするのは、卒業してからにしたいのだが、「うん。卒業したら、幾らでも方法はあるんだだけねえ」「ほう。あるのか?」

「大学に進学するつもりだけど、ちょっと遠いんだ。下宿しようと思うんだけど、そこならば誰にも邪魔されずに、理想の環境を作れると思うからね。実代も一緒に住むかい?」

「それはいいな。そういう未来があるならば、ここからの一年ぐらいならば、我慢もできるかもしねん」

起ころるかもわからない未来について語り合のは、楽しかつた。実代と一緒に生活をする。一緒に登校して、サークルにも入らず、帰つてきたら読書をして、僕が作る美味しくない晩御飯を食べて、のんびりと語り合。まさか、同居をお互いの両親が許すとも思えなのが、いつかそんな生活が出来ればと、心から願つてしまつ。「それでも、やはりこの場所は惜しい。一年は、きっと長いのだろうな」

「本さえ読めれば、あつという間なんだろうけどね」

僕たちは苦笑してから、最後になるかもしない文芸部での穏やかな時間を過ごした。

生徒会からの正式な通告があったのは、翌日だった。

放課後、部長である僕と、副部長の実代が生徒会室に呼ばれた。対応したのは、生徒会長の不破だけだった。

「いや、すまないね。他の者は皆、出払つていてな。もうすぐ体育祭があるので、僕一人で説明させてもらつよ」

不破はいつもと変わらぬ調子で僕たちにソファに座るよつに言い、向かい合ひ形で自分も座つた。

「今回ることは、残念だつた。僕自身が最終的な決断をしたので、僕がそういうのも、少々おかしい氣もするけどね」

「なに、生徒会長の決断は、生徒の総意だろ。君を恨む道理はないさ。それに、残念だと言つたのも、本当なのだろ。憎めないセリフを言つものだ」

実代が不敵に笑う。不破はやれやれと肩を竦めて、コホンと咳払いをひとつした。

「僕個人としては、文芸部は存続させたかったのだがね。他の部からの反発が強すぎた。本日を以て、文芸部は廃部となり、以後、あの部室は資料室として、図書室に入りきらない本を格納する場所にすることにした。幸い、本棚などの備品は揃つてゐるからね」

あの場所に、本があるだけでも救いになる。というところだろ。か。改めて廃部だと言われると、急に現実味を帯びてきて、僕は自然と肩を落とした。実代も隣で、大きな溜息をつく。

「どうにもならんか？」

「どうにもならないね。これは決定したことだ。文芸同好会を設立するならば、相談には乗るがね。部室を使うことはできないが」

「部室があつたから、入部したわけだしね。同好会を作る理由がないさ」

申し出を断ると、口から自然に溜息が漏れた。

もう、あの部室で本を読むことは出来ない。あの場所で、実代と語らうことが出来ない。

もう、あの穏やかな時間は、帰つてこないのだ。

失う」との辛さは、かつて実代と別れを決意したときに味わつてゐる。実代を見ると、じつと俯いて、何かに耐えるように拳を握りしめていた。その様子を眺めていると、不意に涙がこぼれた。

「鷹成、泣くことはないだろう。君と雪吹さんが別れるわけでもあるまいに。ただ、文芸部が潰れただけだ」

不破の言葉に、実代が物凄い勢いで立ち上がり、不破の胸ぐらを掴んだ。

「お前に何がわかる。あの場所が、私たちにとってどれほど大事なものか、お前にはわからないだろうが！」

実代が声を荒げるのを、はじめて見た。

目をつり上げて、今にも不破を殴り飛ばそうとしているかのよくな怒気を孕んで。

「わからんさ。君たちが恋愛感情をうまく捉えられないように、僕にも文芸部にこだわる理由がわからない」

不破は冷静な声で言い、実代の手をゆっくりと解く。それから、不意にニヤリと笑い、僕を見た。

「まだ話は終わっていない。話半ばで感情的になるなど、君たちらしくもないな」

「……どういう意味？」

「言葉通りさ。雪吹さん。鷹成に対する想いの強さも、文芸部への執着もよくわかつたから、座つてくれないか」

不破の言葉に、実代は釈然としない様子ながらも、再び僕の隣に腰を降ろした。まだ怒りは収まらないのだろう。不破を睨み付けたままだつた。そんな実代を気にした素振りもなく、不破は淡々とした様子で言葉を続けた。

「いいかい。ここから先は僕からのいや、生徒会長としての僕からの提案なのだけれどね。資料室を作成するにあたって、管理する人間が必要になるんだ。まさか司書をもう一人雇うわけにいかないし、出来れば、生徒にその権限を持つてもらいたいと思っている」思わず、僕と実代は不破の顔を見上げた。

「生徒会の人間が務めてもいいのだが、ご覧の通り、僕以外は出払つているというこの状況だ。会長の僕が留守にするわけにはいかないし、かと言つて人員を割くほど暇でもない。それに、本を扱うわけだから、本を愛している人間のほうが都合が良い」

実代が、不敵な笑みを浮かべるのがわかつた。そして、このとき

ばかりは僕も、実代と同じようにニヤリと笑ってしまった。

「後は、言わなくてもわかるだろ。元・文芸部の部長と副部長。今はその任を無くしたが、あの部屋をよく知っているし、これ以上ない人選だと自負している。本人達の了承さえあれば、すぐにでも任命したいと思っているのだが」

不破はそれだけ言って、やれやれと溜息をついた。

文芸部は潰れる。しかし、僕と実代は再び、あの部室にいても良い。そんな状況が生まれるなんて、ちっとも想像していなかつた。

「不破……君ってヤツは……」

「怒つて損をした。まったく、意地が悪いのには人が良いとは、ややこしい男め」

「きちんと流れ通りに説明しただけさ。それで、鷹成君と雪吹さん。資料室の管理のほう、お願ひできるかな？」

不破の問いかけに、僕と実代はお互の顔を見た。実代は相変わらず、不敵に微笑んでいる。僕もきっと、いつも通りの顔をしているのだろう。そして、答える必要すら感じない回答を、僕たちは言う。

「不破の頼みだしね。謹んで引き受けるよ」

「そういうことだ。生徒会長の頼みとあらば、致し方ない」

「……快諾してくれて嬉しいよ」

やれやれと肩を竦める不破に、僕たちはもうどうしようもなく嬉しくなり、そのまま飛びついてしまった。

それから、一週間ほどは少々大変だった。

僕と実代はいつの間にか生徒会役員という肩書きを『えられ、資料室管理という役割を言い渡された。

図書室の蔵書が飽和状態というのも本當で、本を大量に移動して、虫干しをしたり、分野別に分けたりと、比較的真つ当な仕事をさせ

られた。

それでも、いざそれが終わってしまった後は普段と変わらない。少々手狭になってしまったが、ソファとコーヒーのドリッパーはある。ラジカセもこっそり流している。資料室といつのは名目だけで、実際は普段から読まれない本を格納しておく場所なので、蔵書を探して人がやってくるなど、滅多にない。

つまり、本当に名目だけが変わつて、やってくることはちつとも変わらないというわけで。

「実代。図書室から来た本だけど。面白のこっぽいあるよ。古いからつてバ力にできないね」

「ふむ。折角だから、片つ端から読み尽くすとするか。一年は長いと思ったが。中々に短くなりそうだ」

僕たちも相変わらず、文芸部室改め資料室で、穏やかな時を過ごしている。

「しかし、流石にこいではもつ、良俗に反する行為はできんな。鍵を閉めるわけにもいかんし。不破のやつめ、何が忙しくて人員が割けないだ。ショッちゅう顔を出してはコーヒーを呑んでいく。おいで」とキスもできん」

「まあ、いいんじやないかな。不破の持つてくる本、けつこう実代も気に入つてゐみたいだし。それに、別にこの場所でする必要もないさ。二年も待てば、飽きるほどできると思うよ?」

僕たちは、きっとこれからもずっと一緒にだ。確証は無いし、恋人同士の絆は得てして壊れやすいと聞く。それでも、一緒にありたいと願うのが、恋人たる所以だらう。

「そう言えば、両親に同棲の許可をもらつたぞ」

「……そういうのは、普通言わないと思うんだけど」

実代もやはり、考へていることは同じのようだ。この先に、僕たちが別れることなんて、幾らでも考えられるはずなのに、そんなことは構いやしない。

「いい加減に恋人ぐらゐ作れと言われたからな。思わず将来を誓つ

た男がいると返してしまった。大学からでも同棲したいほどに、と付け加えてな

「将来を誓うつて……まあ、語弊がありすぎるけど。それもいいね」

今、僕たちは恋愛という感情を胸に抱いている。

思いつきのような未来予想図ですら、現実にできてしまいそうなほど、恋をしている。

「さぞかし怒られるだろうと踏んでいたが、あの親は娘を一体、何だと思っている。手を叩いて喜ばれた。あらうことか、娘がようやく女らしくなってきたとさえ言われた」

「順風満帆つてやつじやないかな。僕の両親も最近、僕に恋人が出来たつて気付いたみたいでね。家が狭いから、彼女と同棲しても、大学生になつたら下宿しろだつてさ」

もし、これが物語であれば、やはり肺炎に罹つていい。今ならばきっと、僕たちは窓を開け放つて、世界に向けて愛していると言えるだろう。

僕たち自身は、はしかに罹り。物語は肺炎に罹り。病人ばかりのこの場所から、臆面もなく愛を叫ぶことができる。

「ふむ。そう考えると、やはり一年は長いな」

愛を叫ぼう。狂おしくなくて良い。ただ、隣にいるだけの幸せを。

「長いほうがいいよ。この場所で、実代と一緒に過ごせるなら、長いに越したことはない」

この曖昧で朧気だけど、安心できる存在を。

「……本当に、誠一は不思議だ。これだと、長くても短くても幸せじゃないか」

僕たちがみつけたものを。

「まさか、今から言つ言葉を、口にする口がくるとは思つていなかつた」

ただ、世界に向けて言つよりも、まずは目の前の恋人に。

「ほう。どんな言葉だ？」

僕の初恋の人。

「ひどく陳腐で、ありふれた言葉だよ」

僕に恋を教えてくれた人。

「ふむ。随分ともつたいぶる。何なら、私から言おつか?」

僕が恋を教えた人。

「けつこう緊張するんだよ。大丈夫、僕から言つから」

一緒に恋を探した人。

「ふむ。ならば、心して聞こつ」

雪吹実代という恋人に、この言葉を最初に伝えたい。

「……実代。愛してるよ」

「うむ。私も誠一を愛している」

実代は不敵に微笑み、それから少しだけ頬を朱に染めた。

最終話 ハッピー・エンド（後書き）

拙作にお付き合いいただき、ありがとうございました。皆々様の佳き恋を、この物語の結とさせていただきたいと思います。

2008年 4月29日

春の夜が明ける頃。白闇に光る星を眺めながら。

伊達倭

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6290d/>

本からみつける恋の文字

2010年10月8日12時48分発行